



今月の発信—— あこら大阪/あこら阪神共編

213号

あれから女たちは——

# 阪神大震災

- ◆阪神はいま… 山際美代子
- ◆あの時わたしは… そして、いま  
阪神のお母さんたち… ボランティアたち
- ◆発信する被災地の女たち  
笑女/女のネットワーク'91/うみづな/北川れん子の報告 ほか
- ◆新聞記事に見る「震災と女性」 尼川洋子
- ◆被災地の生の声はどこにある？  
パソコンネット GIRL TALK/ボランピア通信/じゃりみち
- ◆被災地の女が立ち上がった 〈ウイメンズネットこうべ〉 正井礼子さん
- ◆被災を契機に外国人にやさしい政策を 長谷川暁子
- ◆新たな後方支援の方法を探して 伊藤美恵
- ◆地震と災害保険について 澤田和子

I  
速報●私たちの旅

II  
NGOフォーラム

III  
政府間会議と行動綱領

IV  
資料

北京会議の報告集を出します。

Iは〈あごら旅の会〉の速報ですが、II III IVは、  
〈あごら〉以外の方々のお力もお借りして、できる  
だけ臨場感のあるものを、と思っています。

ワークショップの記録、写真、資料、感想文等々、  
お待ちしております。

採用させて頂いたものは、薄謝をお贈りします。あごら「北京会議記録集」係

## 阪神はいま…

### 山際美代子

「海を見に行こう」「おいしい中華料理を食べに行こう」「おしやれな服がほしい」など、何かにつけて訪れていた神戸、今年はめつきり足が遠のいてしまった。

あの震災から十か月、取り壊された家の跡がすっかり更地になってしまっているかと思うと、まだ傾いたまま、人氣もなく無残な姿を見せているビル。六甲の上から見下ろしても、青いビルを被った建物がまだまだ多い。仮設住宅の波板トタン屋根が異様な雰囲気だ。商店街がおいおいに賑わいを取り戻してきているのを見るとほっとするが、営業活動はまだ十分ではあるまい。道路事情にしても、旧に復するまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。

大阪に住んで、被災度もかすり傷程度だった幸せに甘んじているつもりはないのだけれど、離れていればいるだけ、見なければ見ないだけ、関心は薄れ、当事者の痛みや苦しみ、悩みからも遠ざかって気楽に暮らしてしまっている。

国内でも世界でも事件は次々起こるし、身内のことだつてなおざりにできないことをいつばい抱えている。いつまでも一つのことにかかわつてはいられないという思いもよぎる。マスクミの報道量も少なくなつた。一時はあんなに大勢いたボランティアも、大半が潮の引くように引いてしまった。

けれども、当事者となつた人たちは「見ない・聞かない・しない」では暮らしていけないのである。非常事態からやや落ち着いた現地では、例えば「心のケア」など新たな問題点が見えてきているという。女だからこそ気付いた問題点もさまざまだ。ボランティア活動もそれについて新しい展開を余儀なくされている。

離れていても、見ていなくても、せめて共感する柔軟な心は失いたくないと思う。

巻頭言 阪神はいま……	山際美代子	1
座談会 あのとときわたしは……そして今……	山際美代子	
——被災地のお母さんたち、そしてボランティア	澤田 和子	4
発信する被災地の女たち ——女の通信・ミニコミ情報から		26
被災地の生の声は、どこにある？ 女性だけのパソコンネットGIRL TALK ほか		36
被災地の女が立ち上がった 正井 礼子さん	西野 紀子	44
留学生を受け入れるやさしい政策を作る契機に	長谷川暁子	48
新たな後方支援を探して——辻 幹雄氏の音楽を被災地に届けよう	伊藤 美恵	53
地震と損害保険について	澤田 和子	60

新湊川公園のニーちゃん —— ベトナム人被災者の女の子の報告	高島 淑子	62
TOPICS 〃がんばろうよ神戸〃 インド料理店「あしゅん」ほか		66
めじやーなりすとのめ わたしの北京行動綱領	石野 伸子	70
気になる英語 エンパワーメント	奥川 睦	72
意見／異見 「国民」には認められて「個人」には認められない平和的生存権	飯岡 裕保	74
沖縄問題に怒りの声 私たちの「怒りのコフシ」／「暴力」の島は「核」の島ほか		77
あこら読書室 〃いのち〃の源はどこに？ お産を考える ほか		82
女ひとりドケチ旅 8 イランへ	辻 みゆき	84
あこらのあこら		93

# 阪神大震災——

## あのときわたしは…そして今…

神戸・西宮のお母さんたちとボランティア

※ききて 澤田和子／山際美代子

〈すくーるすばる〉は石井布紀子さんの主宰する学習塾です。阪急西宮北口駅のすぐ近くにあります。ここが、阪神大震災のあと自然発生的にボランティアの拠点となつて、大きな活躍をしたことは、二〇五号の斎藤さんのルボでも紹介されていました。〈DENNEN〉(関西弁の「そうでんねん」から)と名付けたその救援活動グループは、四月に解散しましたが、その後もここを拠点にして、被災地の救援活動を続けながら、情報交換・発信をしております。

今回の座談会では、被災地で生活が続けている人たちの生の声を聞こうということ、〈すくーるすばる〉に通つてこられるお母さんたちと救援活動を続けている人たちに、震災時やその後の生活について意見を聞かせていただくことにしました。この日は、石井さんの計らいで事前の予告は一切なし(話すことを前もって考えてしまうと率直な意見が出にくい)、朝の十一時過ぎに、お子さんを連れて〈すくーるすばる〉に集まつて来られたお母さんたちに事情を説明して、話し合いをしていただきました。お昼になると、座談会の合間をぬつて石井さんが炊いたかやくごはんに具たくさんのみそ汁、それにフライや煮物などたくさんのお母さんの食べ物が並べられ、それまではしやきまわっていた子どもたちも手をのばして食べはじめました。昼すぎには、ボランティアの人たちもボツボツと帰つて来られ、話し合いに参加していただきました。

なお、この座談会には石井さんのお母さんも参加していただいています。娘から主婦の感覚を目覚めさせてもらつていというお母さん。石井さんの一連の活動をあたたく、いえむしろ尊敬のまなざしで見つめ、支えておられる様子が印象的でした。

## あの日のこと、それから

A 私の家は木造で、傾いて住めない状態になりました。でも、すぐ隣に夫の両親の家があつて、そちらは一部壊れたりしたのはものの、何とか住める状態だったので、夫と子どもと三人で移ることができたのです。ここには、近所の親戚の家に住んでいた年寄り夫婦、二階で寝ていたので無事だったのですけど、彼らも来ることになり、しばらくみなで一緒に住むことになりました。最初のうちは気が張っていましたし、「火事場のバカ力」がわいたのか、朝も早くから起きて夜中まで頑張つて片付けをするなど、今思えば、余裕のない生活を送っていたようです。

三月になつて、ちよつと一段落して、自分も落ち着いた頃から、物音に敏感になり、夜中もちよつとした音が目がさめるようになりました。余震もあつたりいつも揺れている感じで、時には「うわー」と物がせまってくるような気になつてしまふのです。今までの体験上、「これは疲れてるわ。寝なきゃ」と思い、身体を休めるようにしたんです。おばあちゃ

んが心臓の悪い人なので、家のことは全部私がやらなければなりませんでしたが、少しペースを落とすようにしました。

それから、五月になり、出かけなければならぬ用事ができたんですが、しんどくてだるくて……。でも気持ちの問題だと思つて出かけたところ、脈は早くなるし、これは大変だとかかりつけの医者に診てもらつたんです。不整脈だということ以轻いクスリをもらいました。睡眠薬も飲んだり、体重もぎりぎりの線までいき、三十五キロになりました。椅子に座ると骨に当たつて痛く、それでそれから二、三か月は家の中がひつくりかえつていても、そのままにして、最低しなければならないことだけするようにしたんです。たまたま専門の本を読んでいたもので、これはストレスだと思い、身体を休めるようにしました。

B そんなこと勉強していたの？

A もともと心の問題などに興味があり、本や新聞を読んだり講演を聞いたりしていたの。だから、今回の自分の状態が「心身の疲れ」というものだとかわかっていました。長い間会社で人事関係の仕事をしていたので、そのようなケースも知っていたのよ。

B それで自己診療、自己治療ができたんやね。

A 心身症ということも知っていたし、治るということも知っていたから。でも肝臓の辺りが痛くなってきたときもあつたよ。

B 医者に行つたの？

A かかりつけの医師だけ。だいたい周りの人の話では、みんな何らかの症状がでたつて聞いたわよ。それも、普段から自分の身体の中で弱かつたところが多かつたみたい。統計では被災者の七〇パーセントだつて新聞に書いてあつたしね。

C 私も過労状態になつたときに、同じような状態になつたわよ。

B Aさんは年いくつ？

A 四十四歳。

C 身体のあちこちが痛くなつて、ガスが溜まつたり胃が重いつとか、いろいろあるそうよ。弱いところに次つぎ出るらしい。

B うーん、怖いねえ。

A 私、ストレスやと思つた理由は、いやなことがあつたときに痛みがきたり、眠られなくなつたりする症状が自覚でき

たから。悲しかつたのは友達が震災でなくなつたことで、そのことを思い出すと辛くて、忘れようとすると思ひ出したりしてしんどくなる……。これはストレスだと思つた。「でも、これはしょうがない」と自分に言い聞かせました。本当に胃潰瘍になつた人もあるそうだけど。

C でも、自分のことよく知つていてよかつたね。今はもういいの？

A ようやくよくなつてきました。体重も四十キロをやつと超えるようになってきたから。

B 四十代というのは何でも全部肩にかかつてくる年代やからねえ。

A そうね。おじいちゃん、おばあちゃん、そして同居をはじめたばかりのおじさんたちのこともあつたし、みんな引き受けてしまった。自分の家のことだけやつたら、物が無くて、「あるもんで済まして」ですんだとしても、そうはいかない。

D 年寄りをかかえてると大変やねえ。

A 主人の母は、若いときから心臓が悪くて重い物も持つたことはないし、いつもマイペースで生活して来た人でした。



でも、この震災の後は、「そんなこと言うてられへん」って重い荷物を持つたり、リュックを担いだり。可哀相に思うけれども、こちらにも余裕がなくてね。しばらくはそれでもつていましたけど、二、三か月たつと心臓の発作が起こりはじめて、私ははらしながら暮らしていたんです。みんな疲労が溜まって溜まって。やがて、おじいちゃんがストレスが溜まって、大声でどなったり、おばあちゃんと喧嘩をしたりと、家の中に混乱が起こった。もともと亭主関白な人だったんやけど、とうとうおばあちゃんと大喧嘩となり、それがきっかけで、おばあちゃん具合が悪化して、このまま一緒にいると、おばあちゃんの命が危ないところまで進んだんです。「これは何とかしなくちゃ」と、知人の家にむりやり頼み連れていつてもらいました。そこでおばあちゃんはほんと眠ったそうよ。

今回の震災がきっかけで、親類同士の同居を始めた人の話を聞くと、金銭的なことや習慣のちがいか、何やかんやとトラブルが発生して、それぞれに大変なようでした。でもその家の事情に合わすしかない。親しい友人のご主人が亡くなったり、小さな子どもがなくなったことを次々聞

くと、またしんどくなるけれど……。

まあ二、三年は身体もこんな調子でいくのかなあ。

E 聞くほうも辛いねえ。

A 聞くのも辛いし、話すほうも辛いし、みんなパニック状態やったね。

B みんな大変やったけれど、生活していかならんかったから、努力したんだよね。ところで、そんな中で、ボランティアしてもらつてどう感じた？

A それはもう、うれしかったわ。まず、友人とかがかけられる電話がありがたいと思った。「洗濯でも何でもするかね」という言葉を聞いてほつとしたし、「何かあつた時にはあそこに言えばいい」という安心感が芽生えますね。それと、ボランティア団体、ここ（DENNEN）や（YWC A）なども、「何か困つたことがあつたら言つて下さい」って言ってくれたから、頼もしく感じたわ。

私の場合、今までの日常生活の中で、子供や友人と一緒にいろいろな活動に参加していたので、大勢の人から声をかけてもらえたみたいです。

C そんなんつてとてもうれしいね。

## 震災で複雑になった人間関係

※ つながりのある人はいいけれど、そんなものの無い人はどうだったんでしょうね。

A そうね。私は普段から人間関係を大切にしていたからよかったです。今でも余ったものがあれば交換をしたり、お互い助け合って生活するようにしているけどね。

C 助け合いも大切やしね。基本的には自立は大事なんだけれどね。何時間も時間をかけて来て下さったのは、本当にうれしかったねえ。

※ 小さいお子さんを持ったおかさんも大変だったでしょうね。

F わたしは尼崎に住んでいて、家は無事だったんですけれど、地震の後、この子（一歳六カ月ぐらい）が熱を出して、ずーっと泣きっぱなしだったんです。その日の午後、家中がガス臭いということで、伊丹にある実家まで車で移動しました。そのとき窓から見たあのすごい景色は、今もはっきり脳裏に残っています。あれから一か月ぐらい、子どもの体調

は悪かった。また、実の親の家といっても氣を使いましたね。子どものことをおばあちゃんが甘やかすし、いろいろトラブルがありました。

B あなた震災前から離婚するとか言っていたけれど。

F でも震災の時、夫はやっぱり頼もしかったですよ。震災直後、会社を休んで手伝ってくれました。それまで、彼は、「俺がやつてやろう」という使命感のない人で、みんなの先頭に立つて取り仕切ったりも苦手な人だったんですけど、あの時は頼り甲斐があったな。男らしかったというか。実は、このあいだ、「やっぱり離婚したい」と思ってた家庭裁判所に行ったけど、あの時のことを思うと、中に入れませんでした。

B どうして？

F 家庭裁判所の扉は重い鉄の扉で、一瞬間開けられなくて。それで結局、思いとどまったのかも知れないな……どうなんだろう？

C 民事の扉と家庭裁判所はちがうの？

F 同じ場所にあるのに、民事とか刑事のほうは普通の扉なんです。

B おもしろいね。ところで、「震災後離婚」っていうのが

あるんでしょ？ 家具に挟まつてゐるのに、妻を放つておいて夫が逃げたとか、その逆で、妻が夫を放つたとか。日頃隠していたはずの本性が出て、あとうまく生活できなくなった人がいると聞いたわよ。

F 私のところも、夫はしばらく仕事に行かなくて、当初はよかつたし、上の子どもは「お父さんが遊んでくれるから」と喜んでいたけれど、段々と変わつていった。「会社へ行こうと思えば行けるのに、どうして行かないの？」といらいらもしたわ。

## 役に立つた初期調査

石井母 娘である布紀子は、地震の直後すぐ、生家であるわが家の家具や食器などを徹底的に片付けて、それから一日半、家族の友人・知人を含めて、たくさんの人たちの安否を確認するために、神戸市のあちこちまでも自転車で安否確認に走り回り、その後は、〈へすくーるすばる〉に入りびたつたまま、二、三か月間、全く帰つて来なかつた。だけど、私たち残りの家族は、彼女に対して不満を感じたことがないのね。

不満どころか、何とか協力しようと思わされていたみたい。どうしてなのかしらねえ。そう、地震の直後に、「電話が通じるか試してみるわ」と言いながら、東京にいる弟のところへ電話したり、全国の知り合いにあちこち電話をかけながら「あつ、ここは通じた」「ここダメね」とかつて、早々と電話連絡を試してみていたのですけど、これには自分の娘ながら感心したわ。その上、しばらくすると、電話が全く通じなくなつたでしょ。余計に、彼女の素早さにびっくりしました。最初のイメージがよかつたからなのかしらね。彼女の全壊したアパートの片付けなどはほとんど残りの家族でやつたのですけど、「ありがとう。ご苦労さま」つて言われてむしろ喜んでくらいだもの。

※ とつさに何をすべきかは、とても大事なことみたいよね。  
E とつさに何をしたか覚えてる？

石井 窓の外を見ると大変なようすなので、とりあえず弟のところへ電話を入れておけば、後はどうにか連絡が回るだろうと思つたの。その後は、自転車で走り回つたことが、後にボランティア活動がはじまつてから、とても役にたつた。「どこの道が危ないのか」とか、「あそこの細い道は通れる」

とか調査をしたのと同じだったんです。

**石井 母** 市内の病院もすべて回ったでしょう。

**石井** この病院が落ち着いているとか、待遇がよさそうとか大まかに知っていました。弟の友人の安否確認のお陰です。大阪の警察病院などの電話対応は、非常によかったと思います。初日から、大阪の病院では、「急患を受け入れよう」と待機していたそうですけど、現地から救急車が出にくい。そこまで行けないというのが現実でした。

※ そういう調査はどのようにしたんです？

**石井** 最初はとにかく自転車。小回りがきくから、どの道が通れるかもよくわかります。活動がはじまってからは、原付か自転車ね。支援活動用にといただいた五十台の自転車は、ほとんどバンクでだめになりましたが、自転車修理専門のボランティアの人の存在がどれだけありがたかったか。でもね、この頃思っています。現地の人たちって、震災直後のようすとしての震災の経験を語ることはできるんだけど、今のことと震災の関連を話すのはあまり上手じゃないあつて……もちろん、私も含めてなんだけど――。

話が変わるけど、Fさんの場合、震災前には「夫と離婚したい」って言ってたでしょ。それが、震災で一度見直して、またこの頃不満が出てきた。それは何でなんだろうか？ もしかして、「困った時に夫がいてくれて頼れた」とホレ直したっていう感覚は、「男の力を頼って楽をしたい」という考えに近くないのかな？ 「男は男らしく、女は女らしく」を助長することにならないかしら？ もちろん、「あの時は嬉しかった」と思うことを悪いなんて言っていないだよ。

Aさんだって、家の問題を全部しよいこんでしまったとすれば、なんか悲しいな。これも大きな女の問題なんちがう？ Gさんの場合はどう？ 子連れで大阪に行くことになったんでしよう。

G みんなの話を聞いていたら自分のことなどしやべつていいのかしらと……。

※ そんなこと言わないでしやべつてー。

G 床がゆるんで、中の家具はぐちゃぐちゃになりましたけれど、今の家は社宅なので、建物は会社が補修してくれました。震災の時は、テレビを見るうちに被害の大きさが少しずつわかり、だんだん怖くなったように感じますね。余震があ

つてガケが崩れるとか、あの時のいろんな情報のほうが、実際の震災よりも私は怖いくらいだったのです。このままここにいたらダメになると思いました。十七日は電気はつけたまま服も着たままで寝ることにしたんですよ。

翌日、とにかく脱出したいと思って、夕方に大阪の我家に避難したんですけど、梅田に着いた時、周りは普段と変わらないようすで、「助かったんだ」と涙が出ました。それから一か月余りは身体も揺れているようでした。普通に生活はできましたけど、逆に「なんでこんなにちがうのかなあ」と考えてしまうんです。そのうち、「みんなが困っているのに、子どものいることを理由にして、私たちは逃げてきたんだ」と思うようになり、何か悪いことをしているようにも思えてきて気がとがめた。

B でもあなた、たしか「へすくーるすばる」に届け物をしてくれてたわよねえ。

G 石井さんがボランティアとして活躍しているのにと、私は後ろめたくて。実は、「へすくーるすばる」に来るのも怖かったんです。それに、今もう八か月もたつて、次の子どもがおなかの中にいて、私にとっては震災はうすれています。

れが本音です。新聞に震災のこと掲載されていても、余り読みたくないというのが正直な気持ちです。

B 最大余震のときは怖かったね。階下が壊れた人は二階の一間に集まって生活したり、今でも辛いですね。

### 心やからだの弱い部分にひずみが出た

C 私の夫は病院の薬剤師だったので、あのときはパジャマに上着を着てそのまま病院にかけつけ、三週間、全く家には帰りませんでした。倒れた本棚の中で寝て仕事をしていたそうです。自宅のマンションは半壊だったのですが、幸い実家が無事でしたので、そこではらく生活することになりました。娘が二人いますけど、下の娘が、精神的にはしつかりしているはずなのに、避難中に寒さとストレスで、一晩で親指の爪が陥没してしまつてね。やはり、もともとの持病のある弱いところに出たんです。それなのに、その子の担任の教師がとてもきつい人で、避難して遅れて学校にきた児童にもすごい量のプリントの宿題を出した。それもむずかしいのを。私は「こんなときに」と思つたんですけどね。結局、それが

プレッシャーになったのか、彼女は腹痛が止まらなくなつてしまつて……。主人の実家が和歌山でしたので疎開をさせました。過疎の村ですけど、一か月ぐらいそこにいました。クラスでは三割以上が疎開をしていました。しかし本人は悩んでいたようです。先生から逃げているのではないかと、いろいろ心の葛藤があつたと思います。六年生になつてこちらに帰つてきました。

B あなたの職場はどうだった？

C 精神科ですから、やはり多くの問題がありました。私自身も血圧が高くなつたり、眠りが浅く厳しい日がありましたし神経質になりましたね。夫の職場もハードで、二人とも疲れしました。

## 右翼から左翼までが救援活動

※ こちらの若い方は？

石井 こちらの方は学生さんで、年齢は二十一歳です。彼女はこれから長期にボランティアに取り組んでくれるらしいのです。(DENNEN)のことは、学生ボランティア協会か

ら紹介してもらつたんだよね。「何もしていないのが後ろめたい」と週一回、来てもらうことになりました。ねえ、この間、仮設住宅に行つたでしょ？ どうだった？

X 案外明るいのにびっくりしました。

H 一口に仮設に住んでいると言つても、その立場でずいぶん違いがあるようです。今の時点で自分の家の再建の見通しがある人のほうが明るくて、どうなるのか希望のない人の中には、見ているだけで気の毒な感じを受ける人もいらつしやいます。

X あまり深く入りこむのもどうかと思いますしね。話を聞くことはできても、何もして上げられないことを実感するばかりなんです。

B なんでボランティアしてみたいと思つたの？

X なんとなく、良心が責められるような気がして……。何かできることはないのか、やつてみながら考えてみています。

B みんな楽なほうを取るのに、八か月もたつてから行動するんやからえらいねえ。

石井 いまから継続で来て下さるのは、大変ありがたいですよ。兵庫県と大阪府とは、地理的には近いんですけど、状況

の差があるようなので、少し余裕のある方が、定期的に外からの視点を持ちながらかわつてくれるといいと思うのです。もちろん、県内・市内のメンバーも募集し続けますけどね。「自分らの街のこと、自分らの暮らしづくりと一緒にやりましょう」って。

※ 大阪では被災についての記事はまだ毎日かなり掲載されていますが、全国ではどうかしら。

H 夏休みに気分転換を兼ねて富士山に登ったのですが、オウム事件のせいでここは何サティアンだとか言つて騒いだりする人がいて、ほんと震災に会った私たちとの違いを感じました。離れてみるとそれがよくわかります。

※ 今回いろんな立場の人がボランティア活動をしたようですが。

C 震災直後、共産党の人たちが、水を屈けてくれはったのはありがたかった。けど、タスキに共産党と大きく書いてあったのはねえ。

H 長田付近では右翼の人たちが大きな看板を掲げて移動式トイレを設置しましたね。

D 宗教団体が炊き出しをしました。その前を通つたとき

ちようどおながすいていて、どうしようかと思つたのですが、「これを食べたらこの宗教に入らなあかん？」と聞いたから、「いいえ、そんなことはありませんよ」と言われたので、ごちそうになりました。

D 山口組系の暴力団も炊き出しをしていました。男性は近寄らなかつたけれど女性はもらつたと聞いたわよ。

※ 独りぐらしの人が仮設住宅で死んでいるのが後で発見されたりしていますね。

B 普段でも、そういうのはあることやつて。

C 私の周辺ではいつもコミュニケーションがとれているから、そんなことはないですね。

私の住んでいるマンションも半壊でしたが、若い人たちが中心になつて災害対策委員会をつくり、それに高齢者がアドバイスをして復旧に努力しています。とても前向きです。

D 私も平成元年に東京から引越して来たのですが、この辺の人間関係は温かいですね。

※ この人は？

石井 この人、川西市から手伝いに来てくれるのよ。十七歳よ。

B 若いねえ。川西も被害はあつたんでしよう？

Y あんまりなかつたんですよ。特に私の周りは無事でした。

B こことの違いはどう？

Y こは活気があるし、何よりも明るいですね。

C みんな暗いトンネルを潜つたから、明るくなつたように思ふね。

## 主婦の生活体験が生きたボランティア

ちようど二時頃、仮設住宅にバザーに出かけていたというボランティア女性二名が、へすくーるすばる〜に戻ってきました。そこで、座談会の話の中に入つてもらつたのですが、彼女たちへのインタビューは座談会が終わつてからも続きました。

※ いつからボランティアとして参加しているのですか？

J 私は一月末からです。

石井 最初の電話応対にビックリしたんだよね？

J 最初、「アレルギー」に対応できる人を探しているらしい。困っているそうだ」という話を友人から聞いて、三日考えて

電話をしたら、京都の親の会の人たちが相談窓口を引き受けてくれることに決まっていたんです。

でも、何か気になつて……。さらに三日ほど考えてみて

「私も行つてみよう」と決心したんです。そこで電話をいれたところ、窓口の人は早口に住所を言うと「西宮北口駅を降りて、すぐです」とそれだけで電話が切れたんです。

※ それだけで、来たのですか？

J はい。

石井 かつて来る電話には、根ほり葉ほり話を聞いて、「聞いてみたかっただけ」と言うような内容が結構多くて、私はだんだんイライラ焦りを感じてしまつたみたい。平常時じゃないし、ていねいに話をしようとするのは時間のムダだわ……とか、あれこれ思つた時期だつたな。

J 二月を過ぎた頃から、ボランティア希望者に対応するマニュアルが出来たみたいでしたよ。

石井 一日、百回以上も同じ道の説明をしていると本当にイヤになつてしまう。それで、駅からへすばる〜までよく使うコースの案内マニュアルを作ってみました。ボランティアに来てくれるという相談がまとまつた場合、目の前にいる人に



マニュアルと受話器を渡して、「読んで説明してあげて。終わったら切ってくれていいよ」と言う。そうすることによって気分的にちよつと楽になつたんです。

でも、その頃の電話では、私はたくさんの人を傷つけてしまったと思います。たとえば、「あの……ボランティアしたくて電話をしたんですが、私はその……引っこみ思案でこれまで積極的に何か行動を起こしたことがないんですが、それでも今回は、勇気を出して電話してみたいです」つてかかつてくるでしょ……。気持ちを受けとめて欲しいという、声にならない声が聞こえてくるんです。しかし、そういう気持ちはほとんど無視して、「あつ、そう。でもね、今のところあなたの勇気なんていらねえ。それでも、来たい？」なんて……。

※ そんな時期からJさんは来てるんですよ。

J ここに来てみて、「ボランティアに來たい」とか「物資を送りたい」という電話があまりに多いので、びつくりしました。しかも、自分たちの思いとか善意を伝えたいという内容が多いんです。こちらとしては、援助を求めている人たちの声や情報を少しでも多く受けたい。電話対応の大変さはこ

こに来てみてよくわかりました。

石井 電話もそうだけど、Jさんが来た頃は、在庫管理もできてなくて困っていました。どこのボランティア団体もそうだったみたいだけど、私たち自身、あふれる救済物資が、どこにどれだけ置かれているのか、出入庫の細かい実数とか、正確に把握できないまま、とにかく緊急と思われるケースにのみ対応していたんです。

しかし、在庫管理体制を整えた方がいいということで、在庫出し入れ管理のシステム、しかも管理者が毎日来れなくても、きっちり引き継ぎができるようなシステムを作る仕事をJさんに頼みました。彼女たち数名は、暗い倉庫の中で一日を過ごすような地味な活動のリーダーとして、入れ代わり立ちかわりやって来るボランティアたちをまとめてくれたんです。私にとってラッキーだったのは、よい人材に恵まれたことで、自転車のパンク修理を専門にやつてくれるG君、救済物資の医薬品を整理して一覧表を作ってくれるグループなど、救済活動の現場には行かないけど、それを裏から支える活動をしてくれる人たちが多くいたことでした。

J 私は主婦ですし、朝九時すぎに西宮に入り、夕方五時に

は帰るパートボランティアです。ただ、大阪在住だから長期にわたって来ることができる。

「そんな私にできることってある？」と考えた時に在庫管理かな、って思ったんです。すごい量の物資でしたし、この人たちは「何でもいから渡してしまえ」というようなことはしたくないと、努力をしているようでしたが、体制がうまくできていなかった。ただ、やりはじめてみてわかったことなんです。日々めまぐるしく変化する在庫管理を泊り込みできない主婦ボランティアがするのは、なかなか大変でした。私とG君とでお互いの都合を確認しあつて、穴があかない体制を作ったのですが、変化の早さにはとても対応しきれない。そこで、他の人たちにも「あんたが絶対来んとアカンでえ」とか、「がんばって在庫みといてやあ」と押しつけたりして、何とか物資の動きを把握できるようにしていました。石井 震災救援活動報告の講演の時によく話しましたけど、私たちの活動がそれなりに評価されたのは、女性の視点でいろいろな事に対応できたことが大きな理由の一つではないかと思うんです。医薬品のチェックにしても、日常の問題意識をうまく盛り込んだ企画案をどんどん取り入れたことがよか

った点じゃないかな？ 二月の初めの頃には「暮らしをつくるには？」を考えての援助に切り換えようと努力しましたから。オムツとウエットティッシュ、お米と漬物といった配慮をあたりまえのように提案してくれたのは、学生よりも主婦の人たちでした。

「学生さんも、何かしたいという気持ちがあつてここに来ているんですが、何をしたらいいのかわからないという人が多かったようですね。もちろんまわりの状況を見て何をすればいいのかすぐに判断する人もいましたが。石井さんが「被災した人が自分に必要な援助を自分で得られるようになることをめざして欲しい」と言うから混乱した人もいたみたい。臨機応変にできない場合は、私たちがサポートして具体的な指示を出したこともあります。

石井 年を重ねるといふことは、いろいろな積み重ねなんだと、今回の活動の間に何度も感じました。本当にたくさんの方を教えられたように思います。「さんには、「そばにいていろいろ支えてほしい」と無理を言つて、集中的につめて来てもらった時期もありました。

「あの物資の山を見れば、放つてはおけませんよ。誰かが

するだろうではなく、私がかんとかしなければ……なんて思いつめてましたから。

※ 自宅からここまで、交通費などどうされていましたか？  
J もちろん自分持ちです。被災地に迷惑になることはなるべくしないようにと、阪急梅田の駅でトイレをすませて、西宮では水分を取らない。帰りも梅田の駅でトイレに駆け込んで、電車に乗って家に帰る。それがあたりまえのことだと思っていましたね。

石井 でも、こういう気づかいをしてくれる人は少なかった。「トイレの水が流れないんですか？ だったら帰りますね」って言った人もいました。宿泊で来ていた何人かの高校生の親御さんから「今日の夕食は何でしたか？ きつちり食事をさせてもらえるんでしょうね」という電話がかかってくるので、いろいろな考え方や関わり方があるのだと知りました。

## 役に立ったボランティアのコーディネーター

※ Kさんはどんなきっかけでボランティアをしようと思ったのですか？

K 二月末頃に、「何の資格もない若い人たちが神戸にいっぱい押しかけ、ボランティアが余っている」というニュースを耳にしました。私は、「その人たちはどうしてボランティアをしようと思ったんだろう？ どんな思いを捨てて神戸から帰るんだろうか？」という事を自分の目で見て考えたくて、それで神戸までやって来ました。結局、来年の三月まで専従スタッフをすることになっています。

J 登場の仕方も強烈やったね。

石井 来るなり、「私はボランティアの世話人をやります」と申し出てきたんです。今だから言えますが、「フキちゃん、怖そうな子が来たヨ」とその頃世話役をしていた人たちから報告を受け、入ってきたのがKさんでした。

K 私は、ボランティアの世話をするボランティアが、いちばん必要な時かなあと想着。自分なりの下心も持っていたし。

石井 三月は、ボランティア志望の人がたくさん押しかけて来た頃でした。いちばん多い日は一日に七百人ものボランティアのコーディネーターをして、疲れて人に会うのがいやになった時もあつたんです。そんな時にKさんが飛び込んで来た。

でもいきなり世話役というのは怖かった？（笑）し、ちょうど野菜の管理体制を建て直したいと思っていたので、野菜の管理をしてもらう事を頼んでみました。

K 野菜のことだったら、八百屋でアルバイトをしていたので自信があつたんです。それと、高校時代に演劇部で裏方のリーダーをした時に、二十人、三十人の人たちのスケジューリング調整などを経験していたから、ここでもできるだろうと単純に思っていました。あんまり深く考えていなかったんじゃないかな。

その頃、初めてボランティアに来た人たちはふつう、石井さんから「じゃあ、とりあえず物資倉庫へ行ってみて」と言われました。で、みんな倉庫に行つてみると、私が倉庫の使い方を説明するんです。倉庫の中を自由に歩いて、何がどこにあるか自分で確かめてもらつたり、「炊き出しに行く時に、必要なものがどこにあるのか覚えておいて下さい」と指示を出して、その人が後で動きやすいようにあれこれ工夫しました。「わからないことは、その場で古い人に聞いてみて」と言うようにしていました。

J 古参の私としては、何度も同じことを言うのはしんどい

ので、最低これだけは読んでほしいマニュアルをあちこちに張り出しました。ところが、「読んだ？」と聞くと「ハ―イ」と返事が返ってくるけれど、頭の中に内容がきちんと入っていない。読むことのへたな人が多かつたですね。

K 特に春休みを利用してきた高校生なんかは、なかなか動きにくそうだったね。

※ ずっと見てこられて、震災直後からどんどん様子が変わつてきていると思いますが、今後どうすればいいとお考えですか。

J これからも、続けていかなければならないと思います。簡単に復興するわけでもないし。ただし、その時その時の状態を見ながら、活動の方法を変えないといけないでしょうね。たとえば、物資の流れを考えても、一月は、水やカツプラーメン、使い捨てカイロ、下着、衣類といった生命にかかわるものが物資として送られて来て、二月を過ぎると生活物資全般にわたつた在庫が増えるようになり、被災者の人も欲しがりはじめていました。それと平行して、炊き出し用の食料と、大ナベ、プロパン等がどんどん送られてきました。

石井 本当にたくさんの物資をお預かりしました。でも、で

きるだけ丁寧に聞き込み調査をしてから渡すようにしていたので、なかなか一度に減ってくれなくて、溜まる一方だった時期もあります。避難所からの物資の依頼内容も、「下着を五十枚、長袖なら百枚」から「五歳男児のパンツ二枚と歯ブラシ」など、本当に雑多になっていきましたね。でも、「必要な援助を被災者自身が要求できるようになってほしい」と思っていましたから、その一つ一つについていねいに対応してきました。

J 炊き出しも大変やったね。

石井 今思えば、「炊き出しをやった経験があるから、現在の活動をどうしたらいいのかを考えられる」とも言えるような一大仕事だった。一日に避難所など大小二十から二十五か所、三千食前後の炊き出しを一月以上やり続けたんです。ただし、「私たちが『ぜんざい』を作りたいから一日だけ作ります」というのはやめて、野菜をできるだけ多彩に取り入れた汁物の炊き出しを継続させることに決めました。そして、通いながら現場での協力者を増やし、避難所内のメンバーで作ることが可能になったら私たちは手を引くという、避難所自立のための目的を忘れないようにしながら、やり続けてみ

たんです。しかも、自立可能な場合には、行政に食材料を購入してもらおうというオマケつき。このオマケをつけるのは、なかなか大変でした。

J テレビによく写されていた、中央体育館の夕食時のスー  
プ炊き出しは、二月から五月まで続けましたね。一時は毎晩  
千五百食作っていた。「中体班」という炊き出しチームが生  
まれて、この人たちは、昼二時三十分頃に「すくーるすばる」  
横の倉庫を出発して、夜九時ごろ帰るということを毎日毎日  
していました。でも、これからはもう少しペースダウンした  
活動をどう継続させるかがテーマだと思っています。

### これからできるだけ有償にしたい

※ これからもずうーつと来られるのですか？

J ぼちぼち来ます。私も、経済的な負担もあつて、七月には「もう、やめようか」と考えたことがあるんですよ。

石井 何とか交通費だけ出せるようになった時でも、「さんは絶対に受け取らなかつた。

K 今日からは新しい第一歩を踏み出して、交通費をとつて

下さることになりました。

石井 今、活動の有償化へむけてだいぶ体制を整えているんです。

※ どういう経過があつたのですか？

石井 震災後三か月の間は、ボランティアの食事や宿泊の世話、交通費の負担について、私たちの活動では、ほとんどすべて自己負担となっていました。来てくれる人たちが多かったのと、東京や東北など全国各地からだつたので、どうにも負担できなかった。ただし二月半ば頃から、へすくーするするの塾生の保護者が管理していた下宿用の部屋を一部屋と、世話役のボランティアの実家である半壊家屋をお貸し頂いて、宿泊場所は用意可能になつたんです。食事は、炊きだしに残りなら自由に食べてよかつたかな。でも、お風呂ほかすべて自己負担が原則だつたから、長期で来てくれた人の負担額は相当なものになつていたはずですよ。地元ボランティアの中に、生活情報をつくれるのが得意の人がいて、五十人単位でお風呂にいくならどこがいいとか、どこなら食事が安く食べられるなどの情報を流してくれていました。その後、「いつまでも無料奉仕では続けられないから、残念だけどやめな

ければ」という人が出てきて、緊急支援に関してはともかく、長期的に必要な事柄については、ボランティア活動としてではなく仕事として関わってくれる人を探したいと検討を始めました。今では長期間活動に携わっている人から始まって、ほとんどの人が、交通費や人件費などを受け取ってくれてます。

K 本当に大勢のボランティアがこの基地を支えてくれたと思います。有償制度のきつかけになつたのは、ボランティアの世話役の男性二人の生活をどう支えるのかということでした。彼ら二人は被災地在住者で、一人は、今仮設住宅で生活しています。泊まり込みのボランティアの生活の部分をも支え、時には息抜きをさせたりして、皆の面倒を見てくれました。

※ 若い人ですか？

石井 三十二歳と二十三歳です。

J 私には帰るべき家があり、生活を支える仕事もありました。もちろん、活動のために休んでいましたけど。でも、彼らは仕事も探しながら活動をしていた。震災直後しばらくは彼らの生活のことなど考えられない状態でしたが、三月半ば

になると、ボランティア漬けの彼ら二人のことを考えずには  
いられなくなりました。

石井 そこで、私の震災報告講演のギャラはすべて事前に了解を得て、彼らの人件費として使わせてもらうようにしはじめたんです。これはやがて、いろんな方法で経費としての人件費を捻出する工夫につながっていききました。

K 私の場合は、今のところ一日千円の食費を頂いて、あと「すくーるすばる」で居候をする生活費をすべて負担してもらっています。

三月まで働くことが決まるまでには何度も追い出しをかけられました。「期限を決めて、期限になったら帰れるように行動してくれないと困る」と何度も言われた。それでも、今後の自分の人生のことを考えて、どうしてもしばらくこの土地の変化の様子などを見ておきたいと思つたんです。それで、「石にかじりついてでも居る」つて決めた頃から、追い出しの勢いが止まりました。

石井 「この人、はまりこんだわ」と感じた以上に、このはまり方は本物だろうと思いました。でも学校を休学すると言っているし、私も休学して親に心配かけたことがあるから、

親御さんの心配もしてしまつて……。

※ 学生さんなの？ 親御さんからは何とか言つてこられない？

K 「あなたに送る生活費は義援金だと思つているから。ただし、勉強はしろよ」と言われています。

石井 母 昨日も、おばあちゃんからお野菜が送られてきていました。ナスやキュウリが一つひとつ丁寧に葉っぱにくるんであつたんですよ。

K 「野菜が不足しているだろう」つて。実家で採れたものです。

「そのような方に支えられてここまでこられたのですよ。もちろん、大勢来られた人の中には、いわゆる「ファッション感覚」の人も多かつたですけど。「被災地行つて来た、ボランティアもやつた」と言いたい。憧れの神戸ですもん、ここは。東京からも九州からも、新幹線に乗ればすぐ来られるしね。奥尻や雲仙は不便だけれど。

※ Kさんもそういう人だと思つた？

石井 彼女はそんな関わり方とは思えませんね。でも、みんなが彼女のように「はまつてしまう」のがいいのかどうかは

わかりません。ただ、今、三十人くらいの方がそれぞれのペースで、百人くらいの方がこちらからの発信に応じて、協力して下さっているんですけど、この人たちのほとんどは私にひどいことを言われながらも残ってくれた人。六千分の百つというとうなんでしょうね。多いのか少ないのか。

実は、ここだけではなく、各NGOグループのトップたちは、外部の人たちの、震災地のその後への関心があまりにも急激になくなったことにショックを受けています。「阪神に来て、見聞きしたことがきっかけになって、それぞれの人が地元に戻って何らかのアクションをしてくれればいいんだよね」って言ってますけど。それにしてもあまりにもさーっと引いていったので、びつくりしたのも事実ですね。私の場合は、「緊急救援活動は、できるだけ短期でやめたほうがいい」という気持ちに変わりはありませんが、「震災を忘れないようにして街づくりにかわる」という新たな視点に立つて、一応、今後の動きとして、長期的視野を持った活動をしていくことを決めました。

K そこで、救援活動グループ（DENNEN）を打ち切りにして、街づくり支援プロジェクト（結ふ（ゆう））を発足

させました。

## 救援活動から街づくり支援に転換して

※ 具体的にはどういう活動をしているのですか？

K これまでの活動をふまえて、長期的に続けていきたい活動、あるいは単発の企画等です。それぞれ、一つひとつを独立のプロジェクトとして担当責任者と活動体制を作ってもらっています。今、活動中のプロジェクトは六つ。その中の一つである執行部は、他団体への応援や手伝いもしています。ほかにはたとえば、お年寄りにオムツを運ぶヘリリーの会、というのがあります。ここは、地元の民生委員さんとの協力体制もしつかりしているし、社会福祉協議会からの評価も高いという、すぐれもののプロジェクトです。

※ 「ヘリリーの会」というのは、どんな会ですか？

K 各地区の民生委員さんとの話し合いのもと、寝たきりの高齢者の方を中心にオムツやウエットティッシュなどをお届けするなど、障害者・高齢者の方への生活物資の配達をやっています。西宮市・芦屋市の盲人協会の人とは、この九か月



ほどで大きな信頼関係ができています。一人ひとりの病状や背景を考慮しながら、過剰にならない長期援助を考えているらしく、メンバーの人はすごく勉強になります。個別対応をとっても上手にやっています。

石井 救援物資のお届けというのは、震災直後から続いています。さまざまな事件の原因になる仕事でした。感動も呼び起こすし、混乱も引き起こす。

混乱のほうについて話をしますが、たとえば、「子どもの下着が欲しい」という話の結果、箱単位の大人用の布おしめが集まってしまう。これは送って下さる方々とのコミュニケーション不足による事件の例で、結局私たちの業務が増えるわけです。また、受け手である被災者側に対して、初期には「欲しいと言える状態を作って、欲しいはずの人に、欲しい物を、欲しいだけ渡したい」という気持ちを持つていたんですけれど、どうもそれではトラブルが増えます。「もつとくれ」「三年分くれ」「別のものも用意してくれ」「何であいつだけやるんや」という声をあおる結果を呼んで……。三月も終わり頃になると、「今あるものを優先して、どこの・だれに・何を・どのように渡せば、誰の・何を支援するために役

立つのか」を確認しながら一つひとつの仕事をしようと、発想がどんどん変化してきました。

J 今、〈結ぶ〉のプロジェクトの一つとして、〈エプリー〉というグループが仮設住宅でふれあいバザーをやっているんですけれど、バザー用の物資として支援物資に頂いたものも使っています。地域の人に格安で購入してもらって、売上げの一部は、〈結ぶ〉の経費や活動費にもなっているんです。

K このバザーは、仮設住宅住民と私たちや、仮設住宅同士のコミュニケーションが目的のバザーなので、ただ買ってもらうプログラムとはちがうんですけれど、地域の人が払ったお金が、地域の活性化に使われる。私たちもそのために使う。そんなシステムが実現できればいいなあとと思って始めてみました。

石井 もちろん、「バザーの収益は活動資金にします。よろしかったらご購入下さい」という看板を掲げてやっています。物資を提供して下さる方にも事前にご了承頂いてから送って頂くようにしています。

K 西宮浜という仮設住宅四百件地区に行った時は、トイレットペーパーとか箱ティッシュが喜ばれていました。こうい

うものは軽いけどかさばるので、交通の便の悪い仮設では買  
つて来るのが大変なんです。」「ここの仮設では、八百屋は  
来るんやけど、日用雑貨などは売りに来ない。見るだけでも  
楽しいから、また来てや」との声が聞かれました。おじい  
ちゃん、おばあちゃんも出てきてくれるし、ずっと継続したい  
と思っています。

「店の周りにズラツと来られ、ちよつと声をかけると喜んで話をしている方、楽しそうに、人が賑やかにしているのを見ていただけの人。仮設住宅地区を中心にしたバザーに行くと、地域ごとのいろいろな人間模様を見ることができ  
るんですよ。」

※ 現在のスタッフは西宮市在住の方が多いですか？

石井 うーん、そうでもないですね。地元の方は単発の企画にはよく参加してくれますけど。というのは、へすくーるすばる」にもともと出入りしていたような地元の人たちは、震災前からやっていた活動をどう継続させていくかのほうに興  
味・関心があるみたいなんです。それに、当然のように地元の自治会にも参加しているわけで。だから、ここの支援活動のスタッフに登録して下さる方は、大阪や京都の方が大半で

すね。これからは、被災地で仕事を失った外国人の方や、仮設住宅居住者の方との連携を進めて、有償活動に参加して頂けるといいなと思います。

K 「ボランティア活動というより、街づくり活動としての新しい仕事だね」とよく話しています。

石井 そのあたりの共通理解が出来たので、私たちは、全国にむけて、後方支援のグループ募集と講演会や学習会をした  
いグループ募集の企画案をつくりました。阪神大震災の支援に関わることで、自分たちの街づくり・地域活性をはかりたい人たちと、もう一度出会っていきたいと考えています。

K 今ご連絡頂いたら、緊急時よりは落ちついて対応できま  
すのでご安心を。

石井 そうだね。これからはこれまでに前向きにやつて  
いこうと思っています。

最後になりましたけど、〈あごろ〉の方には、本当に様  
々な形で、心のある、配慮のあるご支援を頂きました。この  
場を借りて御礼申し上げますとともに、今後とも、ご助言・  
ご協力下さいますよう、あらためてお願い申し上げます。

あごら

女たちは動いた——

# 阪神大震災

- ◆足もとから揺れた——  
駒尺喜美・高木由利子・西田冬至子・藤原美和子  
澤田和子・サンディ サカモト・山原美代子・山田和枝・吉田悠子
- ◆女たちは立ち上がった——  
喜谷美鈴・岡田芳子・高橋ますみ
- ◆現地に急行して——  
城内治美・堀越由美子
- ◆被災の即に出て——  
斎藤千代
- ◆阪神大震災とわたし——  
AGORAZEIN 自立の心理学 しまようこ ほか

三月十日、ともかくも「大震災」を伝えようと、必死の思いで発行した『あごら205号』です。

まだお持ちでない方は、今回の『213号』と併せてお読み下さい。

A5版 112ページ 957円 送料はサービス。

申込先 〒160 東京都新宿区新宿一―九―四―三三三

TEL 031335413941

FAX 031335419014

あごら事務局

# 発信する被災地の女たち

震災以前から、草の根の女たちは、自分たちの生の声を載せた通信やミニコミを作っていました。それらが地震後も人々の心と行動を支えていたように見受けられます。マスコミには取り上げられていない貴重な情報でいっぱいなのです。ここでは、震災以後発行されたいくつかの通信の内容を抜粋してみました。

『笑女(SYOJYO)』

連絡先：西海ゆう子

〒六六六〇〇一 兵庫県川西市東畦野山手一―十一―三二

神戸

西海ゆう子

一年足らずの蜜月を  
私はこの街で過ごした  
坂を上って仰げば緑の山  
振り返れば海が見えた  
赤い扉の小さな文化が

私達の初めての住居で

少し体を悪くして

そこで詩を書き始めた

新しい土地に職を得て

この街を去ったが

もう海が見えない

それが悲しく

任地の田舎に落胆し

この街が恋しかった

やがて私は母となり

仕事を持つての子育ては

ことのほか辛かったが

実家に戻る途中立ち寄っては

いつかまたここに住むことを願った

海からの風が好きだった

息詰まる日本の暮らしを

どうしても肯定できず

海にむかつて開かれたこの街から

私は始まる予感がした

こんな風に謳いたくはなかった

山と海に挟まれた

美しい街だと信じ切っていた

この街に住む人々に

これほどまでに残酷とは

考えたくもなかった

地を走った一瞬の衝撃に

建物は崩れ落ち

眠っていた人々がその下に押し潰された

炎があがり

夢は跡形もなく燃えてしまった

怖かろう

痛かろう

熱かろう

そして五千余人の生命が

この街に消えた

災いはそれからも続く

収容所と化した避難所は

被災者を温かく迎え入れてくれるでなく

水も食料もなかった

文化都市とは名ばかりで

株式会社と言われた神戸の利潤は

どこかに行つてしまい

山を崩し海を埋めた開発の

そのつけどけが住民に

重く課せられた

生活を失わなければならなかった

中央政府はなす術もなく

地方もしかり

最高の頭脳が揃つて手を上げた

代わりに暴力団と自衛隊は名を上げたが

惨禍に街は息も絶え絶えだった

けれどけれど

手を差し伸べる人々が

次から次へと被災地へ訪れた

ひとりの力は小さくても

所詮、人を救うには人しかなく

混乱の中で人が光った

それでも

この光景は人の心を打ちひしがせるに

十分すぎた

犠牲者の多くが

老人であり子どもであり

体の不自由な者

幼子を抱えた母親

すべてが私に近い

私の老親であり、私の幼子であり

私自身であり、十年前の私である

私が生き残れたのは偶然

だから失われた生命を償う為にも

誰もが心穏やかに生きられる街が欲しい

海で世界に繋がる神戸は

若い故の私の幻想だった

今思う

最も弱い者が守られてこそと

街が再生するのでなく人が生きて始まるのだ

人の為に街がある

傷は大きく深い

誰がそれを癒せよう

それでも人は生きなければ

ひとりひとりが生きることでした

この街は生き返れない

ただ願う

生きて欲しいと

私はこの街から生きることを始めました

五十五号（一九九五年三月）より

「女のネットワーク91」

連絡先：正井礼子

〒六五四 兵庫県神戸市須磨区潮見台町三・二一六

TEL/FAX 〇七八（七三四）一三〇八

知って下さい――

F. MICHIO

事の起こりは阪神大震災。大地を引き裂く音が、一瞬にして何十万人の生命、生活、人生を変えてしまった。三月の中旬、ある会合で、小さな声だけれど、しっかりとした声で聞こえてくる「避難所でのレイプ事件」について、保健婦をしているAさんから、ショッキングな声があつた。

今にして思えば、当然起こりうる性暴力は、大震災の被害状況や、ボランティアの美談ばかりに目を取られ、また、マスコミも同様の報告しか取り上げないので、私たち被害にあつた女性たちや、子どもたちの叫び声は届かなかつた。神戸方面のある避難所では仕事を持っている夫や男の人たちが出

かけて後、男性が入りこみ、女性がレイプされ、止めに入つた教師が暴力をふるわれケガをしたり、道を聞いたボランティアの女子学生が半壊の建物に引きこまれてレイプされた。さらには、（避難所は、夜も電気がつけっぱなしなのだが）トイレへ入つた男性が、通りすがりに女の子の胸などをさわつていくということ（まさに、プライバシーの一片も無い生活がここにある！）。日常的に、体育館の裏や倉庫の片すみ、救援物資が積まれたかげ……での性交（レイプも含まれる）を幼児たちが見ている。小さな子どもたちがいたすら（パンツを脱がされたり、さわられたり……）されても、それが何なのか気づかない……性被害は男・女を問わず子どもたちにも否応無しにふりかかっている。これらの事件は、一か所ですというのではなく、いろいろな場所からの報告で、比較的小さな避難所で、リーダーシップを取る人があまりいない、あるいはボランティアがあまりいない場所であることが、世間やマスコミの目に触れることを遅らせているようだ。また、当事者も言えないでいる。長期化する避難所での生活は、そこでしか生きていけない人たち（身寄りが無い、仕事がない、仮設住宅に入れない）で、ほぼ固定化しつつある中で、やり

場のない焦りやいらだちが、同じ避難所の女性や子どもたちに向けられてしまう（顔見知りの男性からのレイプは意外に多いという）。弱いものはさらに弱いものをなぶる構造がはつきりと見えてくる。

夫婦の人間関係の危機、中高生のSEX、妊娠、アルコール、シンナーの問題、幼児虐待、性感染症の問題……性に関する問題は山のようにあふれている。しかし、あまりにもプライベートで、デリケートな問題であるため、被害にあつた女性や子どもすら脅かされる状況にあるのだ。夫に言えず、周りの人々は見てもぬふり。世間体のため、彼女らは唇噛んで黙っているしかないのだろう……。これがまたレイプ事件を支えているのだ。悪循環をくり返す。くやし涙がこみ上げ

る。

私たちは「知っている」というだけで何もできないのだからか。

元「従軍慰安婦」のおばあさんたちが「誰にも迷惑がかからなくなった」と五十年経つてからしか言えなかつたように、彼女らにも、気の遠くなるような「半世紀」を持たせてしまつていいのだろうか。一時的な話題ではなく、日常的問題

として、性暴力は「命の問題」としてあなたとわたしで取り組んでいけないものだろうか。

二十七日（一九九五年八月）より

### 「うみづな」

連絡先：〒六五四兵庫県芦屋市緑区二一ー四〇一前中方  
TEL/FAX 〇七九七（三八）七四七〇

スタッフメンバー近況から

金 美恵

私にとつてうみづな舎は、確かに夢を現実にくれた場所であり、いつでも皆が集まれる場所、私たちの基地であつた。地震で、うみづな舎のあつた建物が取り壊される時も、そう悲しいという感じではなかつた。建物なんて壊れても、また、他を探せばいいし、うみづな舎のメンバーが全員無事だつたから、その気になれば、うみづな舎の再開は問題ない——という気持ちだつた。

だけど……すぐ近くで多くの方々が亡くなつた現実は……。



訃報が耳に入る度に打ちのめされた。

大自然の力の前では、普段偉そうにしている人間も非力であつた。

神戸では二次災害である地震後の火災で多くの人が亡くなつたが、西宮では火災は少なく、倒壊した建物の下敷きになつて亡くなつた方が多かつた。老若男女、死に直面して、どんなに苦しかつただろう。どんなに悔しかつただろう。「自分の家族が無事でよかつた」などと言つていられなかつた。

生と死を分けたのは、ひたすら偶然と運命的なものの差であつたと思えてならない。建物・家が倒壊した人で、無事だつた人たちの話を聞くと、皆それぞれに「運がよかつた。たまたま○○だつたから」と言う。私自身のことを話せば、地震の二日前に大きなタンスを処分し、軽いプラスチックの衣装ケースに総入替えしたばかりで、寝室にしていた部屋に重い家具は一つもなかつた。寝室で唯一重い大きなテレビは、二三日前にテレビ台が壊れ、タタミに直接置いていた。家はナナメに傾いたが、寝ている体に物が飛んでくることはなかつた。

人が生きるといふことは何だろう。こんなかたちで命を奪

われて、一体何のために生きればいいんだろう。今までの自分分は？ これからの自分分は？ 何をやるうとしても手につかず、現在のことも、将来のことも考えられないまま時間が過ぎていった。とにかく、家族と居たい、子どもと居たいと思ひ、うみづなの活動は停止したままじつとしていたような気がする。

「うみづな通信」を出さねば——応援してくれていた人たちが、心配して連絡してくれるのに、とりあえず一回通信を出したい。

が、気になりながらも、体が動かない。原稿を書こうとペンを取るとポロポロ涙が止まらなくなつてしまふ。何が悲しいのか整理できない。私の二番目の子ども、息子は、かなり長い間「死ぬ」ということを考えはじめると気分が悪くなり、食べたものを吐いたりした。いつもは元気なやんちゃ坊主である。

うみづなのメンバーは多かれ少なかれ、皆同じ思いであつた。それを振り払うように動き回つていたメンバーもいて、スゴイと思つた。

何回も顔を合せて話をしたが、うみづな舎再建（開）に

向けての話は皆の口からは出なかった。まだいい。まだ考えないでおこう。それでいいと暗黙の了解。

それでも、時は流れていく。いろいろな方たちにお世話になり、住居を尾崎に移した。娘は転校をイヤがったが最終的に諦めた。仕方がない。子どもが元気になっていくのを見ながら、私も元気を与えてもらったような気がする。少しずついろいろと考えようという気になつてきた。さあ、何をしよう。これからゆつくり考えたい。うみづなのことも……。

出せなかった通信編④―地震による二次災害

折口恵子

日雇いを無視するな！ パートをなめるな！

震災後、何週間か経ったころの新聞記事に、マスコミの姿勢を疑うものがありました。被災者を装った「浮浪者」が、避難所で、救済物資を受け取っていることをやり玉にあげている内容でした。地震で家を失くした者、被害を受けた者はよいが、日頃から家を失い、職を失った者に対しての冷たい態度に、腹立たしささえ覚えました。「地震で大騒ぎしてい

るけど、日本の社会には日頃から底辺でしんどい思いをしている人がいることを無視するな！」と言いたい。とりわけ、マスコミのこんな記事を平気で載せるやり方に、より一層の不信任を持たずにいられません。この記事に関連して、知人に聞いた話によると、釜ヶ崎では高齢を迎え病院に入院していた日雇い労働者が、治療が必要にもかかわらず、病院を追い出されているということでした。これは地震による患者の治療のためにベッド数が不足したという理由だそうです。なんとひどいことでしょう。この事実を知った知人の友人が、このような現実をマスコミで取り上げ、みんなに訴えてほしいとマスコミに要望したそうですが、まったく知らん顔だそうです。地震のマンネリ化した取材は、いやと言うほどやりながら、本当に伝える必要がある情報を伝えない――もうマスコミなんて信用できない！

第三十号（一九九五年十一月）より

「結・たより」

連絡先：〒六五八 兵庫県神戸市東灘区

御影町御影字篠坪一三八三ー〈アルプラン〉内

TEL 〇七八ー八二二一六二六二

FAX 〇七八ー八二二一四二四二

新聞記事に見る「震災と女性」 一九九五年二月～十月

作成 尼川洋子

●パート解雇も続出／女性らの訴え切実（神戸／夕刊2・4）

●震災解雇相次ぐー兵庫県内／大半が女性、パート照準（産経／朝刊2・9）

●震災同居：私も八十五歳の父引き取り感情押え切れず感情爆発／無事を喜び握った手も：時とともに重い現実が：（毎日／朝刊2・16）

●復興に女性の声を／「まちづくり推進会議」参加呼びかけ  
兵庫県立女性センター（産経／朝刊2・21）

●女性の相談から見えたもの（神戸／朝刊2・26）

●震災体験 町づくりに生かそう／男女共生や弱者を視野に  
（読売／朝刊3・6）

●ウイメンズネット・こうべ 女性の立場で被災者支援：女たちの家、きょう再開／電話相談や心のケア（神戸／朝刊3・10）

●頼つてばかりいられない!! さあ自立の時／もうすぐ新学期、去り行くボランティア 女性自治会も誕生：神戸（毎日／朝刊3・16）

●大震災 人とくらし／職場がなくなるパートたち①②③  
（読売／朝刊3・18③3・20）

●慣れない「同居」募るストレス／阪神大震災二カ月半―増える女性の悩み相談（読売／朝刊3・27）

●地域との一体感を 仮設住宅入居者と地元住民／西区の二女性「西女性会議」結成へ（毎日／朝刊4・7）

●女性パートタイマー 地域型組合で団結／阪神大震災で解雇続出：ユニオン旗揚げし成果（日経／夕刊4・10）

●県女性センターでフォーラム 男女共生のまちづくり／参加の機会と受け皿を（神戸／朝刊4・14）

●女性の権利一一〇番…被災者の悩みに答えます／地震で夫

が失業、暴力を振るうように（産経／朝刊4・15）

●助産婦さん連携…被災母子支援のネットワークを／体験わ  
かち合い悩み相談（読売／朝刊4・15）

●女性と大震災 女性の失業…政治、企業が力合わせ「地域  
安定」へ支援急げ／パートなど狙い撃ち「出勤できない」口  
実に（毎日／朝刊5・11）

●被災地の風<sup>95</sup> 地方選の底流／女性よ 生活支える視点市  
政に（神戸／朝刊5・22）

●女性の視点で提言します／シンクタンク（ユイ）結成…復  
興の姿 話し合ううちに見えてくる（読売／朝刊6・6）

●復興へ県民の提言集／男女共生の街づくりを…労働や子育て  
一十五項目（神戸／朝刊6・6）

●町づくりは女性の「英知」を／二十四日に県立女性センタ  
ー市民参加探るセミナー（神戸／朝刊6・13）

●大震災 私たちのそれから／主婦の輪 生活犠牲にせず長  
続きを（神戸／朝刊6・27）

●夫婦仲も揺るがした大震災／大阪の民間団体 被災者向け  
の心のケア電話…一割が離婚や性生活相談（毎日／朝刊6・

28）

●主婦の生活目標 震災で変化／頼れるのは隣近所「地域交  
流」増える…広告代理店、千人に調査（読売／朝刊7・8）

●家族にも深い亀裂 阪神大震災、あす六カ月／離婚や遺産  
相続トラブル調停申し立て四十件に…神戸家裁、今後も深刻  
化の恐れ（毎日／朝刊7・16）

●就職難でトラブルも／女性のここからだ電話相談四カ  
月まとめ…被災地で多発（神戸／朝刊7・16）

●弱者へ深刻な打撃…震災女性電話相談四カ月／子の手にマ  
チ針刺した母、親兄弟との同居で気苦労、勉強遅れ、子の進  
学不安…夫婦のきずな固ければ…（朝日／朝刊7・21）

●「地震でわかった！アナタの正体」…震災、夫婦間も裂  
く／県女性センターまとめ 離婚相談が三倍に…生活変化で  
ミソ深まる、子供の名前忘れた／職失つて妻に暴力（神戸／  
朝刊7・27）

●高齢女性パニック…阪神大震災で七十代中心の三百四十人  
調査…「もうだめだ」…女性三五％、男性一三％「自分が頼  
り」…女性一四％、男性三四％（朝日／朝刊8・31）

●震災離婚の危機？／妻の相談二十件、夫はゼロ…「私を置

いて逃げた…」夫婦に広がる心の亀裂(朝日/朝刊9・1)

●世界女性会議/阪神大震災被災者訴え「職業女性の打撃大きかった」(神戸/朝刊9・2)

●世界女性会議/震災で浮き彫り:震災高齢者やパート問題:各国女性に高い関心(読売/朝刊9・3)

●震災の構図/「おうち、大丈夫でした?」:女子学生「被災でも差別」(朝日/朝刊10・9)

(一九九五年十月)より

「北川れん子の市議会報告」

連絡先:千六六一 兵庫県尼崎市東園田町二・七九・五

TEL 〇六(四九三)三四〇四

「めつせえじ」から抜粋

十月十四日未明の余震には、ちよつとびつくりさせられました。

憂鬱な気分になったのは私一人だけではなかったと思います。

でも、朝会う人ごとに「ねえ、今日のはこわかったなあ」と、話しかけていくうちに少しは、気が楽になったものです。最近、災害は備えのない所にやってくると言われてだしていますが、日常のたて直しに懸命な所に、不意を突かれ被害にあわれた方がいらつしやるのではないのでしょうか。誰にもうちあけられず途方にくれていらつしやるのではないのでしょうか。心配です。

直後には聞こえてこなかった報告で、最近震災離婚にはじまり、性暴力の被害が次々と明るみにできています。被害者が悪いのではなく、加害者に責任があり、かつ性暴力は犯罪です。私も微力ながらサポートしてゆきたいと思っています。

NO. 2 (一九九五年十月)より

# 被災地の生の声は、どこにある？

被災地の情報支援として活躍したのは、パソコンネットや生の声を集めたミニコミ誌です。そのいくつかをご紹介します。

女性だけのパソコンネット

〈GIRL TALK〉から

TEL 〇六(四一八) 六四〇三(大川さん方)

伝わらない・伝わらない・伝わらない

大川順子(尼崎市在住)

私が住む尼崎市は大阪と接する兵庫県の東部に位置する。その距離がそのまま私のスタンスである。震度五に近い大震にあいながら、食器一つ割れず、ガスも水道も無事だった。鉄道さえ翌日からは大阪への出勤に支障はなかった。私は被災地に住みながら、傍観者となっていた。

ほんの数メートル西に行けば西宮市との市境である武庫川がある。川の向こうでは倒壊家屋もぐつと増え、神社や学校は避難所となった。川のこちら側でも公衆電話には列ができ、道路には自動車が一列に並び、緊急車両のサイレンが止むことはなかった。

ところが、大阪に出るとまるで空気が一変する。翌日の朝、梅田の駅に降り立った瞬間から、時間の流れが「日常」に変わった。後ろから、同じ阪神電車であつたらしい若い男性の二人連れが、「なんか、違う国に来たみたいや」「ぜんぜん普通やな。俺たちだけがおかしいのかな」とつぶやく声が聞こえた。

当初、職場では、職員の安否確認に追われた部署もあつたが、基本的に震災以前の延長で日常の業務が進められていた。しかし、帰途につく電車の中からまた「被災地」が始まる。

食料やガスコンロを買い出しに來た被災者たちが車両に目立つ。一樣にカジユアルな防寒着を来て、ナイロンのリュックをお揃いのように背負つていた。不思議に悲壯感はなく、こざつぱりとした印象すらあり、それはこの国の物質的な豊かさを物語っているようだった。電車は甲子園までしか行かない。そこで降りて、さらに西へ何時間もかけて歩くのだろう。あの時は、スーツを会社のロッカーに置いて、「被災地ルック」に着替え、そうして通勤していた人も少なくなかった。震災直後からしばらく、私は被災もしていないのに、「被災地」のギャップを往復することによる疲労感が積もつてきた。

大阪の職場には、京都や奈良、和歌山などからも通勤してゐる。震災直後は、人々が口にするのはもちろんすべてこの大震災の話題だったが、TVでしか見ていない人と、実際にそこに身を置いて見た人とは、気持ちに大きな隔たりがあるように思えた。そして、それは日ごとに拡大していった。

数週間を過ぎた頃、いまだに出勤してこない課長職の男性に非難の声があがるようになった。「〇〇課長の家からだともう電車も通つてゐるし、同じ町内の△△ちゃんとはちゃんと出

てきてゐるのにねえ。こないだ電話で話したら、水汲みが大変だとか、瓦礫のかたづけがどうか、私に八つ当たりするねん。全壊したり、もつとたいへんな人もおんのに、ネチネチ被害者意識が強すぎると思ふワ」と、お弁当の時間に女子社員が普通の上司の陰口として話していた。

その女子社員と「そうや、そうや」とはやし立てる同僚は、奈良と和歌山の住人だ。もちろん被災地を見ていない。夫が出勤したあと、子供とお年寄りのめんどうをみながら、水汲みに奔走して日が暮れる主婦の気持ちを想像したこともないらしい。

はつきりわかつたのは、人は自分の体験したこと以外は、心の底ではわからないということ。さらに、ひとことで被災地といつても、被災の程度はさまざまで、被災地に住む人同士の隔たりも歴然としてある。何度も激震地へ足を運んで、皮膚感覚で震災の爪痕を感じとつたと思つてゐる私だつて、本当のところ、瓦礫の下敷きになつた肉親を助け出せなかつた人の無念さは、どう想像してみてもやはりわからない。強い者には弱い者の気持ちがわからないだろうし、お金持ちは貧乏人の、美人は不美人の気持ちなんか、一生わからないの

と同じだ。

そして、こうして書き進めていても、ぬぐい難い虚しさがつきまとう。文章は文章でしかない。映像も映像でしかない。あの時の、そして今の被災地の空気は絶対に伝えられない。マスコミが威を発揮するのは「共感」の付加価値が生まれた時である。阪神大震災の被害のようす、その後の被災者の状況など、全国に、全世界に報道されたが、ごく一部を除いて、共感はいえぬのだ。オウム事件のように、「アイツが悪い」という共通の敵もない。何の意図も悪意もない、ただ、地面が揺れて町が壊れたというシンプルな事実があるだけだ。ほんの数十キロ離れた隣人にさえ、震災の本質は伝わらない。災害とは、本来とても個人的なことなのかもしれない。※〈G I R L T A L K〉は、被災後数か月間、女性たちが何でも言い合える場となっていたそうです。「今後も、女性にこだわって情報交換を続けていきたい」と大川さんは語っています。

### 「ボランティア通信」

神戸YMCA救援センター

TEL 〇七八（二三二）六二〇一

### 「集めてみましたこんな声、あんな声」

生の声を求めて情報収集をしていた〈神戸YWCA〉では、活動中のボランティアたちが被災者の声を集め続けていました。その内容は、震災情報誌として六月に発行を開始した「ボランティア通信」にまとめてあります。一部を、時間の経緯をふまえて、抜粋的に取り上げてみました。

### 〈五月から六月ごろ〉

\* 「仕事ではな、そこそこ頑張れるんやけど、おつちゃん、ほんまは心の中では頑張れへんのよ」

（自宅全壊・須磨区の息子さん宅に避難中・五十八歳）

\* 「大丈夫なわけないやろ」（「昨日の強い風でテントは大丈夫ですか？」との問いに答えて。 （テント生活・三十二歳）



\*「腹が立つのは腕章つけて肩で風切つてやつてくるボランティア。ひとりでなんも言わず公園のゴミをかたづけ名前も言わず去っていくボランティアもおるよ。それがほんとのボランティアとちやうか。心が伝わるんよ」

(長田区・テント村住人・男性)

\*「住みかを失った老人が住める街にするのがワシらの考えの基本や」(灘区・再開発地域・自治会長・六十七歳・男性)

\*「地震の後は何で自分が死ななかつたのかと、おちこんでなあ。でも、みなさん若いかたたちが来てくれはつて、おばあちゃん、水汲みしてあげると言ってくれて。水汲みしてもらっているうちに、だんだん元氣になつてきましたわ。私でもできることないかと思うて、ひとり暮らしのお友達を訪ね歩いてます」

(中央区・自宅は無事・水汲みのお手伝いから始

まつて現在も訪問を継続中。七十四歳・女性)

\*「この前歩いてたら知らんうちにふつと氣が遠くなつてな。ちようど前のベビーカーにのつかかつたんやな。若いお母さんがとつさになかに入つて、私も赤ちゃんもけがさえへんかつた。病院へも運んでくれたんやけど、名前聞いても教えて

くれはらへんかつた。あたり前のことしただけやゆうて。原因は過労と栄養失調やて。弁当あんまり食べてへんかつたら。あれはでも毎日食べられるものと違うわなあ」

(中央区・テント在住・六十三歳・障害者手帳二級の女性)

(七月ごろ)

\*「神戸では辛いことばかりだつたけど、いろんな人に、「がんばれ」ゆうて励まされて世話になつたから、七割は離れたない氣持ちですねん。けど、おじいさんも地震でおかしくなつてしもとし、これ以上ここにおけるわけにもいかへんしなあ。ほんま何にも悪いことしてへんのにこの歳になつてこんな辛い目に遭うなんて思つてもみませんでしたわ」

(中央区・避難所から全壊の自宅アパートに戻り生活。仮設住宅に当たらず、結局六月に親戚の家に引越することが決まる。七十一歳・女性)

\*「うちの息子(小六)、地震の前はこんなに太つてなかつたんよ。救援物資でチョコレートや甘いもんが来ましたやろ。あれをよう食べよつたからね。子どもなりにストレスがたまつてるんやろね」

(灘区・テント村・四十歳・男性・三大家族)

\*「地震がおきた直後はね、一からやり直そうとか言われて、みんな一緒に頑張つとつたのに、一人二人と家に戻つていくとなあ。また、会つても、もうなんにもなかったようなふりして、（みんなで頑張つたことなど）忘れてしまうてるんや。悲しいことやけど、これが人間なんやなあと思うんよ」

（灘区・テント村住人）

## 〈八月〉

\*「あんたら今までなにしとつたんや。なに一ついいふうにはなつてへんやないか。仮設は不便などこにしか建つてない。神戸は変わつてない。ボランティアなんかやめてまえ！」

（中央区・元テント村住人・不便な仮設しか当たら  
ないと、いやいやながら入居を決断・男性）

\*「八月二十日から、ほんまに行き場がないんやから不安で気もおかしくなつてね。二十日近くになつて胸にじーつと手を当てて考えてみても、私自身にやましいこと、ひとつもないの。なくすもの全部なくしたから、こわいことないの。誰にも頼らずここでやり抜いてみるわ。待避所へは行かんよ」

（中央区・中学校避難所・最後の一世帯になつたおば  
さん・八月二十日・災害救助法打ち切りの日に）

\*「八月だけ、ここの会館使つていい言われて、半年ぶりに畳の上座つたら、おばあちゃんが畳をなでて、うれしい、うれしい、言うのよ。ほんまに涙こぼれたわ。畳に座つただけで……。九月にはまたテントに戻れ言われてる。むごいなあ」

（中央区・テント村・八月中だけ公園内の会館に  
出入りを許されたテント村住人・女性）

\*「宝くじに当たつたみたいや。出してみるもんやな。けどな、喜べへんのよ。周りの人らのこと考えたら」

（中央区・テント村。高倍率だった市街地の仮設住宅  
に当選した男性）

### 「じやりみち」

仮設住宅支援連絡会議事務局

TEL 〇七八（三六二）五五五一

この声に耳を傾けて下さい

時間を追つて、避難所閉鎖や仮設住宅に関する批判の声が

高くなっています。十月末現在、仮設住宅入居戸数は五万戸、半数は独居老人で今後の見通しが立たないままだと言われています。そんな中、七月に、仮設住宅支援連絡会議事務局が正式に運営を開始。神戸市を中心とした被災地全域、および遠隔地仮設住宅での支援活動にかかわるボランティア団体・個人に対し、「仮設住宅にかかわる情報の収集と発進、交流促進をしましょう」という呼びかけをはじめました。隔週水曜日の夜、六時から八時まで、神戸市中央区ＪＲ元町駅付近にて全体会議が続いています。

高校生ボランティアから自治会の世話役や主婦のサークルまで、集まってくる人たちは実にさまざま。議題の提案も可能なこの会議では、「孤独死を防ぐために何ができるか?」「行政との連携ノウハウが知りたい」などの具体策について、あるいは「孤独死が発生する背景に何があるのか?」「全国の人に知ってもらわなければならない問題は何か?」などの方向性の確認のために、活発な意見交換が行われています。

八月からは、連絡会事務局通信「じやりみち」を月二回発行、主にFAXを使って登録団体・個人に送信されるような

体制が整い、緊急課題については号外も発行するようになりました。阪神大震災にかかわる全仮設住宅内で暮らす人々のくらしの安全と安心の確保に全力を注いでいます。以下に、「じやりみち」に掲載されている投稿文章から、被災地在住ボランティアが書いた報告文を抜粋しました。

#### 〈東灘区編〉（九月分より）

震災後、家を失った多くの被災者の方は避難所から仮設住宅へ移行している。

しかし震災後八か月が過ぎた現在もいまだに避難所・待機所暮らしをしている被災者もあれば、すでに仮設住宅から出ていつてしまった人もいる。多様な動きを見せ始めているが、やはりここでも問題になるのは高齢者・障害者の多い仮設住宅で、その中でも比較的便利な市街地周辺の仮設住宅は、六十五歳以上の高齢者で六〇%以上もが占められ、超高齢化社会を現出している。

文字通り仮住まいのために建てられた仮設住宅の多くは、多くの欠陥不備を抱えており、高齢者・障害者にとつて住みにくい欠陥住宅である。入り口段差解消のためのブロックを

置いたり、ユニットバスの段差解消のための踏み台を配り、手すりの取付けや仮設内の道路の水たまりに砂利を敷く等、住居と周辺環境改善作業を進めながら、一方で、独居老人の話し相手、家の片付け炊事等の家事介助、通院・入浴介助等、現在続けている私たちの活動も、震災直後の火事場のボランテニアと言うべきものから、被災高齢者、障害者の生活ケアのボランテニアに変化しつつある。

その間、「茶話（さわ）やかテント」と名付けてテントやビーチパラソルを持ち込み、時にはバザーや歌・踊り等のイベントを併設しながら各仮設住宅を移動し、お茶と茶菓子で井戸端会議の花を咲かせながら、隣近所と交流のない仮設のみなさんの横のふれあいのお手伝いをさせていただいた。

仮設百戸以上を単位とし、県内百十六か所に建設予定のふれあいセンターも、八月から東灘区で相次いで四か所オープンした。自立組織のない仮設での当面の運営に私たちも加わっているが、現在自治会等の自立組織づくりにより平行して、川柳・手芸・三味線・碁・将棋等の趣味を通じ心がふれあうサークル活動も始まった。

しかし一方で外出もせず、近所との接触もなく閉じこもつ

たまの独居老人も多い。

震災で大きな被害を受け、避難所を出てからは求職もなく自活の道を歩まねばならない高齢者には、日常生活の維持さえ困難な人がいる。このような方々の受け皿はあるのだろうか。職もなく収入も少ない人々の多い仮設の現状では、行く先の手だてもままならない被災者の支援に、これから本腰を入れて取り組まねばならない。

（東灘・地域助け合いネットワーク 殿本 弘）

※東灘助け合いネットワークは、女性たちが中心になって立ち上げた一大仮設住宅支援ネットとして、高い評価を受けています。

### 〈名谷第一仮設〉

静かな落ち着いたまちとして歩みだした名谷第一仮設を紹介します。

老人・体にハンデのある人・母子だけの世帯等六十五世帯が入居しているこの仮設には、入居後四月に早くも自治会ができました。

「自分の親の世話ができるようで」と名乗りをあげた女性

が中心となつて、共に生きる仮設の運営にあたつています。役所への要望や連絡、住民の悩み相談、近くの主婦のボランティアの調整など忙しいです。入居者全員が毎日元氣であることを確かめ、この中から寂しい孤独死をださないために、「朝起きたらカーテンを少し開けること」を決め、互いに無事を確認しあつています。区の保健婦の健康相談巡回訪問が時々ある以外は、商売人の訪問や自動車の進入の規制等、入居者の立場を守るよう考えられています。

会長より「みんなが集まれるテントがほしい」と相談され、へちびくろ救援ぐるうぶの村井さんに依頼しました。現地を訪問されましたが、土地が狭いため実現不可能になりました。そこで考えられたのがパイプ製の「すだれ集いの場」です。資金カンパやボランティアによつて木製のしょうぎが出来上がりました。今ではみんなの話し合いの場として利用されています。へさくらんぼグループの訪問、家庭用品のバザー、茶話会、自治会のお楽しみ会などが行われています。やがて加古川のボランティアから贈られたプランターも葉ぼたんに変わることでしよう。冬にむけて仮設の防寒対策、ふれあいセンターの設置が今後の課題です。

#### 〈西区 仮設桜ヶ丘住宅〉

西神中央駅より押部谷行きのバスで農業公園をすぎ、山並みの中を通り抜け、市営住宅前下車、道路を挟んで東と西に仮設住宅があります。四十八戸の桜ヶ丘仮設と百二十戸の桜ヶ丘中央仮設です。九月中旬台風が上陸する可能性があるということ、仮設の屋根をとめ金でとめていたのは入居者たちです。ここの仮設は独自の自治会組織はありませんが、〈桜ヶ丘ボランティア会〉の皆さんの支援を得て、この町の自治会に加入している人もいます。この度桜ヶ丘にふれあいセンターが設置されました。自治会役員とボランティア会によつてふれあいセンター協議会がもたれ、三十日の開所式にむけて議題が検討されました。「センターにお風呂があればハンデのある人の入浴の世話ができるのに……。仮設の風呂では介添え者が入室できない」と訴えていました。丘の上から見下ろす仮設にはごみひとつ落ちていません。ひとり、世話好きの人に出会いました。次の訪問が楽しみです  
(兵庫県震災復興総合相談センター推進専門員 吉田有公子)

# 被災地の女が立ち上がった

## ★正井礼子さん

インタビュ― 西野 紀子

正井礼子さんは、〈あごろ〉でも何度が神戸での活動が掲載されている女性。一九九一年より、神戸市を中心に女のネットワーク〈ウイメンズネットこうべ〉を立ち上げ、神戸市女性センターを作る運動をはじめ、さまざまな形で女性を支援する活動が続けてきました。震災後は、三月に「女性支援ネットワーク」を立ち上げ、電話相談や、避難所に洗濯機や自転車を送る活動などを行いながら、常に、被災地の様子を、女性の視点に立つて眺め、サポートのあり方を模索されていたように見受られます。今回は、超多忙の正井さんに電話でインタビューをし、「被災地のこれまで、そしてこれから」について語って頂きました。

**西野** 六月に須磨区から、市議会議員に立候補されたそうで、と弱い立場の人だということがわかりました。ということは、救援活動にかかわっていたことと関係があるのですか。

**正井** はい。ボランティアで被災地を走り回っているうちに、稗らしにかかわっている女性の声が市政に取り入れられなけりば、復興なんてありえないということです。私は、四月半神戸市の長年の街づくりの欠陥がこの震災で噴出しているのだと気づいたのです。大災害の時、より大きな被害を受けたのは、障害者や子ども、お年寄り、そして女性たち。もともとこうあつて運動のスタートは五月一日、告知までわずか一月しか残っていませんでしたが、拡声器を肩に担ぎ、手作り

の旗を持って、団地の前での街頭演説を始めていました。

「開発行政はもうオシマイ！ 震災後の街づくり」に女性たちの声を」「党や組織の代表だけでなく、普通の市民の声、女性の声を議会へ」と訴え続けずにはいられなかった。結果は、政令都市の厚い壁に阻まれて、残念ながら次点・三千五百七票を頂きましたが、でも、今回の選挙を通じて得たものをこれから活かしていきたいと思っています。

西野 この選挙活動を通じて、被災地内の女性たちは、大きな勇気を抱くことができたと思うのです。一緒に動いた人たちが、「私も立候補者になった気分」「政治が身近になった」などと言いながら、いきいきしている様子を見て、「おばさんたちの文化祭」というアダムがついたという話も聞いています。コーラス部の人たちが、「翼をください」を「議席をください」に替えて、替え歌を作ったのです。 たった一か月の間に、あれほどの力が集まり、はじめての立候補にもかかわらず、次点になった理由は、同じような気持ちの被災者が多かったということでしょうか。

正井 そうですね。最初、立候補を知った友人たちが「友人のご主人の立候補ならともかく、自分たちの友人が選挙に出るなんて、スゴイ！」とビックリしていたくらいで、今回の

選挙運動は、「選挙運動なんて、やったことがない」という主婦や女性たちが中心となった手作り運動だったのですが、あつという間にいろいろな方からのご支援を頂く動きになっていきました。選挙カーは堺市の議員から、拡声器は尼崎の議員の方からお借りすることもできましたし、全国各地から多くさんの応援の声を頂いたのです。市民派と呼ばれる議員たちが、全国から駆けつけ、「被災地神戸の復興は日本全国の問題です。市民派議員を神戸に誕生させましょう」とエールを送って下さったのには驚きました。私自身、今回の選挙に出てみて、「女性の声を政治に反映させることをどれだけ多くの方が望んで下さっているのか」を改めて実感しています。「復興を男性ばかりに任せておいてはいけない」という私たちの思いを、これからも、被災地で広げていきたいと思っています。

### 性暴力を北京会議でも報告

西野 八月末には、北京会議NGOフォーラムに出席されたそうですけど、全世界にむけて、どんな報告をされたのですか？

正井 被災後の電話件数の報告ほか、子どもや女性たちに起

こつた現実を発表しました。緊急時の混乱の中で、夫から無理やり性交渉を迫られたり、暴行を加えられた妻がいたこと、母親が子どもを虐待してしまう事実があったこと、そしてこれからも増えるであろうことを報告しました。ですが、北京

では、自分たちの報告もしましたけど、世界中の女性たちから、パワーを頂きましたし、これから、その内容を今後の生活の中にどう取り入れていくのか、もつともつと深めていく必要も感じて帰ってきました。そこで、被災地の女性たちが集まって、行動綱領を読む学習会など、具体的な行動を考えていける場作りもはじめています。

**西野** 震災後さまざまな性暴力が行われ、被害にあつた女性や子どもたちが、傷ついた心を癒す場がなかったというのは事実ですか？

**正井** 震災の後、神戸の街は間に支配されました。多くの建物が壊れ、街灯も消えてしまった中で、あちこちでレイプの噂が流れたのですが、兵庫県警はこれをデマだと打ち消しています。マスコミで報道されることもほとんどありませんでした。震災後でなくても、性暴力は、大つびらには追求しにくい問題でしょう。当事者や被害者自身が、「口をつぐまないと仕方がない」と判断することが少なくないようです。た

だ、噂としてではなく、実際に身近で四件ものレイプ未遂事件が起こつたのだという話を聞いた時、私は、どうしても事実をきちんと確かめなければ思うようになりました。

**西野** 七月、正井さんたちは、「性暴力を許さない―震災と性暴力」の集会を開きましたね。やはりたくさんさんのレイプ事件が発生していたのですか？

**正井** ええ。震災直後から三月までの期間に起こつた事件が特に多く、東灘区を中心に三十七件もの報告が聞かれました。神戸市全体では、その二・三倍は発生していることが予測されます。三十七件のうち二件は警察に届けたにもかかわらず、「あなたの将来のためにも忘れた方がええ」と説得されて、帰されたと言います。新聞報道などのほとんどが、被災地住民について、「深刻な被害にあつてもパニックを起こさない、冷静で秩序ある住民」などといった内容を掲載していましたから、警察側としても、「レイプ事件は被災地イメージを壊し、大きなマイナスにつながるのではないか？」という懸念を持つており、そういった事件を表沙汰にはしにくい、という事情があつたのではないかと思います。ですが、だからと言つて放つておくわけには行きません。

確かに、レイプに関しては、一般に広がっているイメージ



とは違い、性的欲望から起きるケースはむしろ少ないはずで、社会的に抑圧された人が、より弱いものを性的に支配し、憎しみや怒りを発散させる行為なのです。そこから考えると、震災後のさまざまなストレスが被災地の性暴力を誘発してしまったことはまちがいないでしょう。ですが、たとえそのような背景があつたとしても、被害者にとつては、心身ともに傷つけられる、人間の尊厳を奪われる行為であり、許すべきものではないのです。しかも、告発することもままならないという現状、このような八方ふさがりな状況に対して、女性たちが力をあわせて取り組んでいかなければならないと思います。

### 支援相談もスタート

**西野** その第一歩として、相談窓口を開いていらつしやるのですか？

**正井** そうですね。女性のための電話相談を週二回のペースで続けていきます。女性たち一人ひとりの声を聞いていると、いろいろな理不尽を感じますし、怒りに身体がふるえることもしょつちゆうです。だからこそ、続けていかなければ。夫から妻への暴行も、母親から子どもへの虐待も、まだまだ増

えるのではないかと思うのです。女性を支援する窓口が本当に必要になつてくるのは、これからではないかという気がしてなりません。今、私たちは、夜間の電話相談も受け付けたいからと、お手伝いして下さる方を探していて、自助グループも計画中なんです。女性を支援する立場でのさまざまな活動を模索しながら、私たちの声を、全国の人々に届けていきたい。もちろん神戸の市政にも反映させたいと思っています。

### 女性支援ネットワークの活動

女性のための電話相談

毎週 火・金曜日 十時から十六時

TEL 〇七八（七三四）一九四四

自助グループ

火曜日 パートナーとの関係で悩んでいる人

金曜日 被害で心や身体のしんどい人

〈ウイメンズネットこうべ〉の連絡先

〒六五四 神戸市市須磨区塩見台町三の二の六 正井様方

TEL/FAX 〇七八（七三四）一三〇八

（機関誌「女のネットワーク91」に関するお問い合わせも上記へ）

## 留学生を受入れる

### やさしい政策をつくる契機に

長谷川 暁子

三月三日〈関西生命線〉が、神戸中央区で「被災地 就・留学生を励ます会」を開いた。在日台湾・中国人そして日本人の方々は、未明の午前四時から鍋料理とギョーザの支度を始めた。十二時頃、外国人留学生二百人が続々とやってきた。明朗な顔を見て、私はホッとした。御馳走を食べながら、四月に大学に入る予定の就学生一人は、私にこう言った。

「今まで日本人が冷たいと思っていましたが、地震の日、何もかも失って、ただアパートの廃墟の前に啞然として立ち尽くしている僕におにぎりを届けてくれたのは、普段あんまり声を掛け合わなかった近所の方でした。日本人すごい、日本人なら早く立ち直れるに違いありません」

「頑張つてね！」

私はのどが詰まつて、それ以上は言いだせなかった。困境中の留学生の遅しさに感動させられたためなのか、それとも日本人のことを留学生が褒めてくれたためなのか、自分にも分からなかった。仕事の関係で、留学生の苦労や悩みや嫌日感を、私はわりと知っている。

半年あるいは年一回、入国管理局へ滞在期間更新手続きをしに行く規制がある。その都度、留学生は許可をもらうために、ほぼ形式だけの保証人の数枚もの書類を揃えた上、自分がつくった「保

証人の援助を受けている証拠”になる銀行通帳と、週に二十時間以内しか働いていない保証書を提出しなければいけない。

日本と経済格差の大きい中国やアジア諸国に住む親類からの仕送りをもらったり、年収五百万円程度の、妻子を抱える保証人から、四年間も月に五、六万円をもらったりということはあり得ないとよく承知する入管の係員に「仕送りを受けています」「保証人の援助をいただいています」と言い張るのは、留学生にとつて決して気軽なゲームではない。だが、学業をちゃんと終えるまで、嘘つきを続けざるをえない。そして、アルバイトとアパートを探す時に入管法違反の立場による差別を忍ばなければならぬのが私費留学生の現状である。

「知日者、知日家が各国にいてくれば、何かの時に日本の役に立つてくれるのであろう」という主旨で、日本は二十一世紀留学政策を計画したわけである。日本とそれぞれの母国との親善関係の発展、強化のための重要な架け橋になつてくれることを願つて迎えたはずの留学生に、彼らが期待される立派な人材になる学習環境をつくらぬのは賢明と言えるだろうか。

嘘をつかなければ行き詰まるにきまつている環境の中に暮らす人、そのため差別と軽蔑を感じて自分の尊厳を傷つけられる社会の中で生活する人は、この環境、社会を生みだした国を愛する親日派、知日家になるどころか、むしろ良識のある学者たちが嘆いたとおり、「中国人やアジア人留学生という集団的な角度から見れば、日本の政策は反日派を養うと言われてもしやうがない」になりがちである。

発展途上国では、祖国をでる出稼ぎ者が千万という単位であり、経済難民問題はすでに本世紀末の、地球規模での深刻な課題となつている。それ故に、国連が来年を「貧困撲滅年」に予定してい

る。

自分の故郷から離れ、海の嵐に命を奪われる危険を冒しても日本に向かつてきた偽装難民や、四年の留学生活の苦勞、差別を耐えて學業を終えたのに母國に帰らず、外國人にとつて「住みにくい」日本で就職することを選択した人、語學學校や大學を卒業しても進學や就職ができず、ヤミの孤独と危険の中で生きる道を選んだ不法滞在者にも理由がある。それは帰結的に言えば、そのような人々をつくりだしている彼らの母國の政治・經濟狀況によるものであろう。この意味から見て、彼らの選択は実に哀しい。

中國やアジア諸國からやつてきた密入國者、偽裝結婚者、オーバーステイ者が増えている。売春ブローカーや惡徳商業者、マフィアまで現れている。しかし、だからといつて、第三世界からの留學生は皆不法滞在者の、ことによつては犯罪者の予備軍とみなされるという現實を考えると、日本の國際感覚がよく磨かれていたとは言えない。

十年前、「留學生十萬人受入れ」という、數で勝ち取る國際化のブームに乗じて選別されず玉石混淆で日本へ押し込まれた人を除き、留學生の多くは、學費、授業料、生活費などの重荷をかっさながらいろいろな困難を乗り越え學業に勵んで立派に成長した。現在、それぞれの母國と日本の各分野で、他の者に代え難い能力を發揮している。

歴史上、異國の文化・經濟・政治交流で最も活躍し、大きい役割を果たしていたのは留學生であった。いうまでもなく今後も國際社会で期待できるのは若い留學生である。阪神大震災は大勢の人々に殘酷な経験させた。全日本中にはその悲しみの「余震」がいまだに感じられている。しかし、日本人は再び自分の忍耐強さ、どんな境遇でも秩序が乱れず礼儀正しい優秀さ、一から立ち直

ろうという決意と行動を世界に顕示して、外国人の称賛を博した。

試練を受けたと同時に、日本は過去、現在と将来の事を、より冷静に考える契機を得たと言つてもよい。日本が良い国、アジア全土に信頼されるメンバー、国際社会に尊敬される一員になるには、国民は国の政策を考え直すべきではないか。留学生受入れ政策もその一つである。

今回の震災を契機に、日本の将来にも役立ち、受入れた就学生・留学生にも感謝されるやさしい政策、貧しい国からの留学生が安心して勉強できる受入れシステムが作られる日、そして日本のことを好きになつてくれる知日家、親日派がより多く現れる日を私は期待している。その時、震災によつて受けた大きな傷もいやされることだろう。

\*

震災後すぐ、外国人に対するボランティア活動を始められた長谷川暁子さんの母上は、平和運動家として名高い長谷川テルさんである。

長谷川テルさんは一九一二年山梨県に生まれ、エスペラント語を通じて中国人留学生・劉仁さんと知り合い結婚。一九三七年日中戦争直前に、愛と信念のため祖国を捨て中国に渡った。日中戦争が拡大し、戦火に追われて中国各地を転々としながらも、エスペラント語で戦争批判の文章を書くと同時に、日本軍兵士向けの反戦放送に従事。当時の東京・都新聞に「嬌声売国奴」と彼女の記事が掲載され、両親や兄弟が肩身の狭い生活を強いられた。男の子と女の子に恵まれたが、戦争終結二年後、三十四歳の若さでこの世を去り、失意の夫も続いて亡くなった。

彼女についてはその著作がエスペラント語であつたため、日本国内ではあまり知られていなかった

たが、一九八〇年テレビ界初の日中合作作品「望郷の星」として俳優座の栗原小巻主演で放映され、知られるようになった。

暁子さんはこのテルさんの長女として、一九四六年四月中国に生をうけた。翌年母と父が亡くなり、兄は叔父に、彼女は孤児院に引き取られて成長。大学を出て結婚し数学教師になったが、文化大革命の時、日本人の子どもであることから地方へ追われた。教え子から石を投げられたりしたことから、日本人の血を意識するようになり、エスペランティストや多くの日本人有志の援助で日本の大学へ留学をした。

この後の彼女の努力はすさまじく、自らの力で大阪経済法科大学の非常勤講師の職を得て、夫と娘を日本へ呼び寄せた。中国名「劉曉嵐」から母の姓「長谷川暁子」となり、現在は京都と神戸そして大阪と三つの大学の非常勤講師をして生活。娘さんも大阪大学経済学部留学生として入学、最近公営住宅ながら家も手に入れて、日本人としての生活も定着した。

阪神大震災のときはすぐに被災地を訪れ、外国人支援のボランティアとして活躍された。これは暁子さんが「関西生命線ニュース（八月十日発行）」に寄せられた文章である。なお〈関西生命線〉は、「台湾語・北京語によるいのちの電話」として、在関西中国系人をサポートしている。

（相談電話　〇六（四四一）九五九五）

（澤田和子記）

# 新たな後方支援の方法を探して

辻幹雄氏の音楽を被災地に届けよう

伊藤美恵

不眠不休の活動から一息ついて、今、思うこと

秋、衣替えの季節がきて、あの時着ていたトレーナーを手にしたとたんに、私の心は傾いたビルや、こみの山になつてしまった家々、ひび割れた道路のある風景に引き戻されました。

私が阪神・淡路大震災の被災地に初めて足を踏み入れたのは地震から三日経った一月二十日でした。最初は、被災地の友人に物資を届けることだけを考えていた私ですが、いつの間にか、不眠不休の救援活動に三か月も没頭していました。(「すくーるすばる」を拠点とし、各地からの救援の申し出やボランティアの受入れと、被災地側のニーズをコーディネートしていく救援グループ「DENNEN (でんねん)」に加わりながら、その活動をどう支えていくのかを考え続けてきました。

被災直後の混乱もおさまり、非日常だったはずの避難生活を、それなりの日常として受け入れた生活が一段落ついたころになると、緊急の救援活動はその役割を終え、将来を見通した形での新たな活動が必要となってきました。緊急事態として、自分の生活を投げ出して救援活動をするのではなく、被災している人も、そうでない人も、被災地に住む人も、他の地域に住む人も、それぞれが

自分の生活の基盤をしつかり固めてかわつていくことが大切だと考えられるようになってきたのです。

四月初め、〈DENNEN〉も解散し、その活動を引き継いだ〈プロジェクト結ふ（ゆう）〉は、現地で暮らす人々を中心としての息の長い活動の在り方を模索し始めました。長期間現地に留まったり、定期的に通つてその活動に加わるなど、一年・二年先を考えながらそれぞれのスタンスを決めた人々が地を足をつけてかわり続けようとしています。

私は、自分の本来の仕事が続けつつ、今後どのようにかかわつていくのかを被災地の人々に委ねることにしました。長期的視野に立つて、良質の活動を続けていくためには、一瞬の善意だけでなく、仕事として責任を持てる形でかわりたいと思つていたからです。

私の仕事は基本的には乳幼児とそのお母さんのための教室と学習塾の運営・指導ですが、もう一つの仕事として「音楽の助けを借りて、いろんな人とのコミュニケーションを考える」「磁場メソッド」という音楽療法」を、もう十年余り続けています。被災地のお母さんたちの「被災した「今」の状況をマイナスととらえず、これを機会に親子で育ちあうことのできる前向きな企画を考えたい」という希望もあり、「ラブ・ライフ・ワーク」と名付けられた親子で育ちあうワークショップに講師としてかわることになりました。

## 震災直後、人々の元気の源は「つながり」だった

「音楽療法」を通してかわつていくことが決まって、私は改めて被災地の中の状況を「人と人



との関係とコミュニケーション」という立場から見つめなおしてみました。

大きな災害の直後、人々は手を取り合つて助け合いました。ところが暮らしに変化が少なくなつて、それなりの安定をするようになると、人と人との関係はいろんな場面でトラブルを生み出していきました。新しい街をつくることに心を向け、現状を嘆くより少しでも向上してほしいと思つたときに「被災地には何が必要なのだろうか？ お金も、技術も、組織も必要かもしれないけれど、まずは誰もが人として気持ちよく居られる街になることが必要ではないだろうか。そして、人間としての感覚を取り戻して、つながりあうことができれば、その中で生きていく活力がわいてくるのではないだろうか」と考えました。

生命に自然治癒力があるとすれば、人と人とのつながりこそがその助けになるはずだと、私は思うのです。「元氣さ」や「生きる意欲」というようなものも、外側から与えるのではなく、被災した人たちが自身の中にある自然治癒力をどう援助するかを、現実的な被害を受けていない私たちは謙虚に考える時期だと思つたのです。

もう一つの視点として、ずっと被災地の中で暮らしながら救援活動にあたっている人々の精神的・肉体的な疲労を無視することができなくなっているという問題がありました。

京都の南・長岡京市に住んでいる私は、阪急電車で西宮北口の駅まで何度通つたことでしょうか。電車の窓から見える景色は、地震前と何の変わりもないベッドタウンから、山間の町の風景を経て、にぎやかな繁華街の風景へと変わります。そして、神戸線に乗り換えて幾つかの駅を過ぎたころから、ブルーシートで覆われた屋根や壊れた壁という被災地の風景へと変化していくのです。その景色の移り変わりを見ながら、地震のことをどんどん忘れて日常の暮らしへと戻つてしまった町と、

なまなましい傷痕を隠すこともできず非日常の碎らしを強いられている町とを往復する日々は、精神的にも体力的にもたくさんのエネルギーを消耗したようです。活動が一段落した今年の夏は例年になく体調を崩してしまい、蓄積してしまった疲労が抜けにくくなっていることを痛感しました。私の三か月足らずの実働部隊としての救援活動でも、夏頃になつてから疲れがたのですから、被災地に住んで長期にわたつて活動している人々や、避難生活をしている人々の緊張はいつ解け、その後疲れがとれるまでにどれだけの期間がかかるのかは計り知れないものがあるように思います。目に見える景色、匂いや埃などをふくんだ空気、そしてさまざまな音……。気づかないうちに人々の心は疲れをためているのではないかと思うのです。

## 人から人へ手渡すことができる音楽を被災地に

そんなことを考えていた今年の七月、いつも「磁場メソッド」のセミナーでお世話になっている辻幹雄氏のリサイタルが奈良で催されることになりました。

辻氏は十一弦ギターの演奏者です。カーネギーホールでのリサイタルのときには、指が動かなくなるまでアンコールの拍手がなりやまなかつたといいます。日本でも大きなホールでのリサイタルや、さまざまなジャンルのミュージシャンとのジョイントコンサートもされるのですが、毎年人と人のつながりをたどつて、小さな演奏会のツアーを自ら企画されます。自分のところで演奏をしてほしいと思う人が準備をするリサイタルは、会場が美術館や小さなホールだったり、教会や神社、お寺、喫茶店や工房、時には個人の家ということもあります。

音楽会の企画については素人の人たちが準備するのですから、もちろんのこと不備な点もたくさんあるでしょう。誠意だけではカバーできないものもあると思うのですが、それでも音楽会社の企画するリサイタルとは違うものがあつて、それは自分にとって絶対に必要なものだと言われまゝ。数年前の小さな教会でのリサイタルの中で「このリサイタルツアーを通じて聞いて下さる方に音楽を手渡すということがすこしわかつてきたように思います」と語られた言葉が今も私の耳に残っています。「演奏をする」ということを自分ひとりの行為としてとらえるのではなく、聞く人との共同作業だと考え、そこに起こる出会いをとても大切にしている彼のギターは、聴衆である私たちの内側に響いてくるのです。

話は少しさかのぼりますが、辻氏は長年にわたる成田闘争にピリオドを打つべく芝山町で開かれたコンサート企画にかかわつて、重要な役割を果たしていました。「SIBAYAMA・さくらコンサート」と題したそのコンサートは、成田空港の騒音直下に位置し、反対闘争の激しかった芝山町の人たちが中心となつて企画されました。彼は「過去の苦しみを、未来につなぐ」願いをこめて、地元の小学生が合唱に参加するレクイエム「時は風のように」を作曲され、七十名を超える実行委員の相談役として、準備の段階からかわつてこられました。

二十八年にも及ぶ反対闘争の末、それぞれの苦しみや想いを乗り越えて新しい街づくりをすすめるためには、人々が心をひとつにしてやり遂げる企画が必要だったのでしよう。実行委員長はそのあいさつの中で、「――それぞれの過去を清算するとき、過去の中だけでは、前にすすむことはできません。新しい未来や希望の持てる地域社会を創つていくという期待感や希望の中でしか清算できないことも学んできました。――中略――これからの地域づくりや未来に向かつての思いが、音

樂を通して人々の心の結びつきのきつかけになればという辻さんの熱意と地域の人々の思いで、今回のコンサートが開催となりました」と語っています。これはそのまま被災地にもいえるのではないだろうか、被災地でこのレクイエムを演奏してもらおう機会はないだろうか、私はいつの間にか考えるようになっていました。でも私のこの思いは漠然としたもので「いつかできればいいなあ」という夢のようなものでした。

その後どう？ これからは？ とこれまでの十か月と出会い直すきっかけに……

この辻幹雄氏のリサイタルに「プロジェクト結ふ」の石井さんたちを誘ったのです。忙しい活動の間なのに偶然、石井さんと岡田さんの都合がついて、二人は奈良まで足を運んでくれました。そして、彼の音楽に初めて触れた二人は、その場からしばらく立ち上がれないほどに感動してくれたのです。彼女らの心で何がどんなふうに響いていたのか、私にはわかりません。でも彼女らは辻氏と同席した食事会の席上で、できれば阪神地区でのリサイタルを企画しようと微笑みながら言っていました。話はどんどん進み、七月の末には辻氏から、秋の関西方面へのツアーの日程の打診を受け、私たちは大喜びで「辻さんのギターをみんなに聞いてもらおう」と準備にとりかかりました。

会場は「DENNEN」の活躍でとても力強い助っ人だった立野由美子さん（モンテツソーリ幼児クラブ主宰・大阪）が親しくしているという神田神父のいる鷹取教会に即座に決定。鷹取教会は今回の震災で被害のひどかった神戸市長田区にあり、今でも復興に協力するたくさんのボランティアアさんたちの拠点になっています。ボランティアさんたちが自分たちの手で建てたという紙のホー

ルができあがつたばかりで、そのホールでリサイタルをさせていただくことになりました。

もう一か所は、〈DENNEN〉の救援活動の初期からお世話になつてきた「三田谷治療教育院」のホールをお願いしてみました。院長先生には、お会いしてすぐに快く承諾していただき、たくさんのお言葉も頂きました。ここは障害を持つ人たちが暮らしたり、通つてきて作業をする児童福祉施設なのですが、地震で建物が一つ全壊したにもかかわらず、無事だった建物のホールを緊急に避難所として開放してられました。そのホールをお借りできるといふのです。

どちらも私たちの思いにぴつたりの場所です。今までの十か月間の活動のすべてが、ここにつながつていたのかと思えるほど、どれもが自然に、ぴつたりとはまつていきまふていくことの不思議を体験して、私たちはもうすぐ本番を迎えようとしています。いろんな出来事のなかで、いろんな人と出会つてきたことが、こうして次の計画へとつながっていきます。どんな出来事もそのことを未来につなげていくことが可能なのだと、この準備を通して実感させてもらったような気がします。

十月三十一日の「鷹取教会」と十一月一日の「三田谷治療教育院」でのリサイタルは、これだけで終わるものではありません。私たちは、辻氏がレクイエムとして作曲した「時は風のように」を被災地の子どもたちの歌声とともに上演したいと考えていますし、今回のリサイタルがその準備の始まりになると思つています。そして、たくさんの人たちとの出会いをかさね、つながりを紡ぎながら進めていく今日の一步が、すばらしい未来につながっていくのだと、私たちは信じています。十二月十一日午後五時より「鷹取教会」で再度「演奏を聞く会」をいたします。どうぞご参加を。

(連絡先) 千六一七 京都府長岡京市長岡二一三・二三 ワークハウスぼろろん

TEL & FAX 〇七五(九五三) 四四五二)

# 地震と損害保険について

澤田和子

三月の「特集あこら」「阪神大震災、女たちは動いた」で私は「これからが大変、損保業務」と書きました。それから数か月、阪神方面の損害保険に関する新聞記事は、この震災で支払ってもらえない損害保険についてのものが多く見られました。それを予測していましたので「大変」という言葉になったのです。

地震が起因での火災は、火災保険だけであれば支払えないと約款にあります。私の会社の顧客は神戸方面にも多くあり、その対応に追われた毎日でした。被災されたかどうかの確認にも手間取りました。地震保険をつけておられた顧客には、今回は保険会社も拡大解釈をしてくれたので支払いも早く、喜んでいただきました。しかし火災保険のみで倒壊された家には、一月十七日より終期までの保険料を返すことしかできませんでした。保険会社の社員も代理店も、初めてのこの大惨事にとまどいながら対応しました。

調査によると、地震保険を付けていた人は全体の三パーセントだということです。なぜそのような付保率なのかというと、地震保険は保険料も高く、補償額は建物で一千万円、家財で五百万円が限度です。また補償の範囲も狭い上、私たち代理店に支払われる手数料も低く、さらに関西地方は地震も少なく、代理店も客も地震保険を積極的に付保しなかったのが実情です。

マスコミがこのことについて報道をしてくれていましたので、私の顧客からはあまり苦情を言わ

れませんでした。代理店として何もしてあげられないもどかしさを感じました。また火災保険のみの方には、地震の発生から七十八時間内の火災は「地震に起因していて免責」となりましたが、何度かの余震とか、他からの類焼など判断に困る場合も多く、水が出ない、消防車が来られないなど最悪の条件が重なりました。業界の報告によると、どうしても納得のいかない契約者と係争事件になっていることもあるようです。無事を確認した顧客からその後の更改のときに「あんたはお菓子を持って見舞いに来なかったからダメだ」とも言われました。保険会社は約款に従って支払いをしますが、最近の新聞に「損保会社最大手の東京海上がそこう百貨店の震災直後の盗難に、地震の免責を適用せず保険金を支払った」という記事があり、大口契約者の優遇が指摘されていましたが、私たちはその会社のやり方にあきれています。

私は代理店業務を個人として十年、法人として十五年しています。ますますこの仕事の重要性を身にしみて感じています。そこうの支払いではありませんが、約款の解釈の仕方ではあることもあり、自分の顧客をどのようにして守るか、努力を続けたいと思います。北京女性会議に参加されたへあこら旅の会）のみなさんの海外旅行傷害保険も多数引き受けさせていただきました。みなさん無事帰国されたので私の業務能力を知っていただけませんでした。今後何か損害保険についてトラブルが発生しましたら、ご相談下さい。お役に立てると存じます。

十勝沖地震、島原の噴火、それにこの阪神大震災が重なり、地震保険も来年一月に改定されますが、あまり料率も下がらず、証券という目に見えない品物を販売する仕事の難しさをかみしめていきます。

(連絡先・千五二三 大阪市東淀川区港路一・五・二・四四八

TEL 06・322・2203 FAX 320・3413)

## 新湊川公園のテントの

### ニーちゃんからののはなし

聞き取り人 ボランティア先生の

高嶋 たかしま

淑子 としこ

〔八月〕

はじめまして。私の名前はニーちゃんといいます。ベトナム人で小学校一年生の、元気でかわいい？女の子です。私は住んでいたアパートが地震でこわれたので、今、新湊川公園にテントをはつてもらって住んでいます。八月になつてテントがものすごく暑いので、“紙の家”が建てられました。屋根は布ですが、壁はちょうどサランラップの芯を大きくしたような筒を並べて出来ていて、テントよりずっと住みごこちはいいです。

お父さんは地震の時、タンスが倒れてきて頭にケガをしました。お母さんと私と弟で助けたのよ。私はとっても強





い子でしょ。でも時々地震の夢を見て泣くこともあります。  
月に三度、土曜日の二時にボランティアで宿題を見てくれる先生が来ます。

教室がないので、公園の樹の下に大きなテーブルをすえて、私たち七、八人と先生四人くらいでお勉強しています。

先生はおじいさん、おばさん、シスター、大学生、学校の先生だった人とかです。

この間勉強していたら、テーブルのそばの茂みに蝶々がじつと止まって逃げないので。先生は「病氣かしら」と言っていました。私は違うと思います。私たちとお友だちになりたいのです。

これはアゲハ蝶という名前だと先生が教えてくれました。でも私は「メリーちゃん」と思います。私たちの紙のうちぐに遊びに来てください。

〔九月〕

こんにちは。ニーちゃんです。

私たちの住んでいる公園にも、秋がしのび足でやって来ました。この間は台風が来そうな空で、雨が降るのを気にしながら、木の上からビニールシートをかけ、その下にテ



ーブルを置いて、勉強しました。これから寒くなってきたら、どうしようかと、ボランティア先生は心配そうな顔をしました。いつまでこうして公園で暮らすのか、今のところわからないからです。お父さんは腰を痛めてずっと仕事に行けないでいます。お母さんがアルバイトをしています。祭日と休日が重なって三日間も働けませんでした。

ボランティアの中の大学生先生が、一か月ベトナムに旅をしてきたそうです。南のホーチミン市周辺に行ったとかで、お母さんはとてもうれやましがっていました。「この震災がなければ、お土産を持って里帰りできたかもしれないのに」と言っていました。

私は今、ひらがなが終わって漢字を習っています。形をとるのがとてもむづかしいです。いくつも書いて、その中で一番いいのに先生は花マルを入れてくれます。いっぱい、いっぱい、花マルをもらえるようになります。

〔十月〕

ハ―イ、ニーちゃんです。

木の下で勉強するのは、ちよつと寒い季節になりました。それで、ボランティアのお兄さんたちと、この公園に住ん



でいるベトナム人のお父さんとで、小さな小屋を建ててくれました。ベニヤ板とプラスチックの波板でできています。私もいつしうけんめいお手伝いしました。重たいプロックを「ウントコショ！」と持ち上げて運んだんだよ。これでボランティア先生が「雨が降ったらどうしよう」と心配しなくてよくなりました。

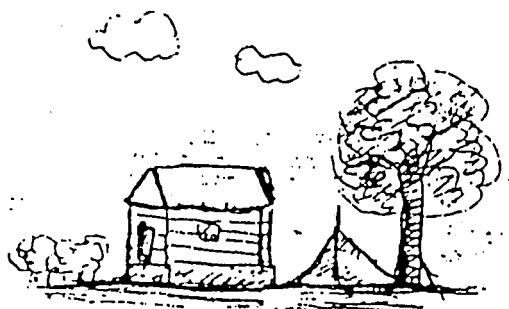
ここで勉強すると、ベニヤ板の匂いがプンプンします。けい光灯もちやんとついています。私たちが使わないときは、お母さんが内職に使っています。クツのノリづけをしています。

大嫌いな二ケタのたし算がおしまいになった時、「遊ぼう」と友だちが来ました。日本人の女の子と韓国の双子の姉妹です。

「よう来たねえ」とボランティア先生が画用紙とクレパスを出してくれたので、いっぱい、いっぱい描きました。ライオン、犬、セーラーモーン、大ウサギに乗ったニーちゃん。

もつともつと描きたいです。

（「あしゅん通信」より）



## 「がんばろうよ神戸」 インド料理店「あしゅん」

三宮加納町にあるこの店に西宮の石井布紀子さんの紹介で訪れました。店主がインド音楽の演奏をしておられた関係から、インド料理を勉強され、昨年六月にオープン。あの震災で店が半壊しましたが、国民金融公庫で融資を受け九月七日より再開されました。石井さんはこの店でボランティアの人たちの取材をさせていただいたということでした。

融資を受けるときの国金の窓口での体験談を聞きました。ご自身は身内が保証人を引き受けてくれたので融資を受けられたのですが、たまたま待ち時間に話をした人から、その人の保証人が九州の人で、すぐに連絡が取れないのでトラブリ、融資が受けられないのだと聞き、そうすれば、あの震災で親類などが死んだりして、近くで

保証人が見つけれられない人は、ずいぶんきびしい状況に追い込まれると思ったとのこと。

「神戸の多くの店が再開できない中で、自分は幸い融資も受けられ再開できたので、ありがたいと思つてます。何よりも働く場所を作ることが先です。店を開け続けることで、神戸の灯を消さないよう、今は年中無休でがんばろう」とさわやかに語られました。

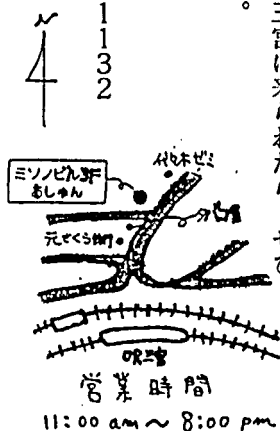
店内にはインド音楽が流れ、お値段も手頃です。三宮からすぐのところですよ。コーヒーだけでもどうぞとのこと、また会議などにも使わせてもらえます。すてき

なお店ですので、三宮に来られたら、ぜひ立ち寄つて下さい。

神戸市中央区

加納町4-10-1

078-322-1132



## 阪神大震災の被災者を「歌」で支援

愛知県の主婦・嶋崎智子さんが自ら作詞・作曲して歌った「95・1・17 何処へ」をCD化、義援金づくりのためにテープの販売を開始します。

嶋崎さんは、悲しみにうちひしがれる被災者の様子をテレビで見て「私も生きているのですね これから生きていくのですね」という復興への希望を込めた曲をつくりました。テープは一本五百円（送料百九十円）、うち二百円はあしなが育英会（震災遺児）に振り込まれます。

「問合わせ先」東京都多摩市鶴牧5-30-8、

TEL 0423-71-1092 佐藤さち子

（佐藤さんは「あごろ」206号本欄で「震災救援コンサート」を呼びかけた方です）。

## 市民の雑誌『神戸から』が誕生

\*震災から半年を過ぎた神戸・阪神で何が起こっている

のか、みんな何を苦しんでいるのか、絶望の果てにどんな夢を持つようになっていくのかをしっかりと全国に伝えたい。

\*阪神の中でも、お互い顔が見えにくくなってきたのか。もつとつながりあつて生きていけないものか。

\*ボランティアに来てくれた人に、義援金をくれたたくさんの人に、「その後」を知らせたい。これからもずっと心をつないでいきたいから。神戸の苦しみと希望は神戸だけのものではないから。

\*「復興」のために国も県も市も、企業も、それぞれできることをしてほしい。市民は市民にもつとでできることはないか、考えたい。こうしてくれと要求するだけでなく、自分の暮らしを自分たちで作つていけるようになりたいから。

\*いちばんひどい目にあつた人たちが一番人を癒す力を持つている。いまだひどい目にあつている人たちの目から、神戸・阪神の癒しを考えていきたい。

\*前に戻すだけが復興ではない。起こつてしまった地震を前向きにとらえて、今までよりもつといい、人間の顔

をした神戸、自然と調和した神戸を作りたい。

\*それには被災者が「お客さん」扱いされず、自分たちの住んでいた場所をこれからどう発展させていくのか、主人公としてかわり、発言していかねばならない。

そうしたいと、みんなが思っている。

みんながいたいことを言い、覚えておきたいことを記録し、明日のために役立つことを知らせ合う為の、被災者自身の雑誌がここに始まる。

こんな呼びかけで、新しい市民の雑誌、「神戸から」が誕生しました。東京から出向して半年間ボランティアを続け、今は神戸に仮住まいして活動を続けている「あこら」会員、城内治美さんも、「下からの街づくり」を目指して中心スタッフの一人になっています。

A4判三二ページ、一部三百五十円、三十部以上は二割引き。販売拡充スタッフを募集中。

〔連絡先〕〒650 神戸市中央区山本通2-3-19  
アートポケットビル(株) 一・一七市民通信手記係

FAX 078-222-6165

## 長田の子どもたちに自然を

### ふれあい基金へご協力をお願いします

「あこら」205号「女たちは動いた《阪神大震災》」を神戸新聞で知り、取り寄せて読ませてもらった濱名育代です。〈あこら〉の活動とネットワークの大きさを知りました。震災での活動には感謝するばかりです。ありがとうございます。た。

一月十七日午前四時五十分、わたしは家を出て一宮町の観音様へお参りしていました。道は雪道で、瓦が落ちているのを見ても、雪のせいなあぐらに思っていました。まさか地震が起こったとは知りませんでした。帰ってからテレビで震災の様子を知り、神戸に住む姉、伯父、伯母と連絡が取れないまま眠れない一夜を過ごしました。翌日、伯母がふるの中で死んだという実家の母からの連絡。ショックで気持ちが高ぶるのを抑えながら、午前中だけ勤めに出、午後と十九日は通夜と葬式に出て家に帰ると、留守中に二本の電話。神戸大学に通っている友人の娘さんが下宿先で柱の下敷きになっ

て死んだということ。思いがけない悲報にふたたび胸がえぐられる思いでした。二十歳になったばかりの娘の突然の死で泣きじやくり抱きついてくる友を、わたしはただ受けとめて一緒に泣くしか何もしてあげることができず、無力を感じました。

その後三月三十一日で仕事をやめ、四十歳を最後にと願って子どもを授かるための治療を受けていますが、神戸の小学校に炊き出しの手伝いに行っただけで何もしていない自分がいやになりかけていました。そんなとき、「長田の子どもたちを南光町の自然の中に」という活動ボランティアを募集しているのを知り、さっそく応募し、現在活動をしています。

南光町は兵庫県の西端、岡山县に近いところにあり、南北二〇キロ余りの細長い山の中の自然に恵まれた町です。仮設住宅に遊び場の公園を奪われた子どもたちに豊かな自然の中で元気に遊んでもらおうと、避難所生活を続ける親たちからの申し入れを受けて始められました。神戸長田からは車で二時間弱、一泊二日で子どもたちを受け入れるには無理のない距離です。新聞にも各地の子どもたちへの招待が掲載されていますが、夏休みだけとかの一回限りが多いようです。私た

ちの活動は手作りで規模も小さいかもしれませんが、毎月定期的に続けていくつもりです。この活動を長く続けていくためには、お金が必要です。「あごら」の誌上をお借りして、基金への協力をお願いをさせていただきます。どうかよろしくお願い申し上げます。

「南光ふれあい基金」

郵便振替口座番号 01130・0・61956

連絡先 〒679・52 兵庫県作用郡南光町

下徳久1005・1 南光町公民館

TEL 0790・78・0101

FAX 0790・78・1225

# わたしの北京行動綱領

石 野 伸 子

(産経新聞大阪本社文化部)

「なぜ、あなたたちは一人のアメリカ人の言うことだけを聞いて、私たち中国人の声を聞こうとしないの。資料に目を通して。話を聞いて」

この九月、北京で開かれた世界女性会議は荒れ模様だった。とりわけ世界から三万人の女性がかけたNGOフォーラムは、会場が突然変更されたり、直前までビザ取得やホテル予約をめぐつて混乱があつたり、中国側の警戒心がモロに出て、フォーラムが始まってからも取材陣は公安関係者の活動妨害や、会場でのデモ警戒に神経をとがらす日々だった。

中でもホットポイントはチベット問題。亡命チベット人女性が中国支配に対し抗議の無言デモを行う。アムネスティのメンバーがダライ・ラマ十四世のノーベル平和賞受賞を歓迎して投獄されたチベット人即時釈放を求めてアピールする。折しも期間中にチベット自治区は成立三十周年を迎え、ラサでは華やかに祝賀式典が行われるというタイミング。チベットに関わるフォーラムは、中国側のものにしろ、西側のものにしろ、中国の公安関係者とマスコミがつけかけ、必ずひと騒動起きた。

それはチベット自治区の女性医師グループによる「チベットの人口と健康」のワークショップでの出来事だった。中学校の教室を借りた会場は、廊下までびつしりと人があふれだし熱気をはらんでいた。突然、一人のアメリカ人女性が「ウィー・ニード・ヘルプ」と叫び、オレンジ色のビラをまこうと立ち上がった。会場はあつという間に混乱し、女性はすぐに主催者側に取り囲まれ、激しい怒号とともに会場から追い出された。校舎の外まで追い出された彼女をマスコミが追いかける。「帰れ、帰れ」と激しい口調で叫んでいた主催者たちがいなくなつたところで彼女はビラをまき、いかに中国政府がチベットに対し人権侵害を行なっているかを訴える。

そのとき、取り巻きマスコミの中にいた若い中国人女性が、突然、彼女に向かってしゃべり始めた。「あなたはどれだけチベットを知っているというの」。胸にはわれわれと同じブルーのプレスカ



ードをぶらさげている。そして、もつと激しい口調で、周辺にいたわれわれに向かってまくしたてる。それが冒頭の言葉。

「あなたがた西側マスコミ報道は偏向している。チベットは中国の自治区になつて以来、よくなっている。その資料は会場にたくさん用意されている。なのにあなたがたはそれを全く無視して、チベットに住んだこともないアメリカ人女性の言葉だけを信用して記事を書く」

何を聞き、何を見、何を書くのか。「自分でもしろいと思つたことを書く」ことを基本姿勢にふだん仕事をしているが、じつは自分がおもしろがつていることのかんりの部分は「なにかの文脈」にのつとつてにすぎない、ということを経る今回の北京会議では改めて痛感した。例えばチベット問題ならば、中国政府への批判という文脈の中で事件を追う。ヒラリー夫人の会議演説ならば中国の一人つ子政策批判という文脈で意味をすくいとる、という具合。まさにそれは中国人記者から言わせれば「西側の論理をそのまま持ち込んだの偏向記事」ということになる。しかし、一方で当の中国人記者の言い分を聞いていると、政府に都合のいい資料だけを信用し、西側マスコミは偏向しているという思い込みに立つての発言であることが、きまじめに反論する彼女の表情から読み取れる。残念ながら彼女の耳には亡命チベット人の声は全く入らないのだ。

国際社会という。地球人という言葉がある。しかし、果たしてどれだけ、その国の人の文脈にのつとり、ものが考えられるか。女性差別という一点をとつても、いかに文脈によつて違つた意味を持ち得るか。今回の会議での行動綱領をめぐる各国のやりとりを聞いていて、つくづくと道のりの遠いことを思い知らされた。家族ひとつとつてみてもイスラム教国と、同性愛者同士の結婚を認めるオランダなどでは、もつ意味が天と地ほどの違いがある。そんな中でいかにものごとの本質を探り当てるか。複眼でものをみる。北京から持ち帰つた私の「行動綱領における最重要課題」だ。

bodyce (単一サイズ婦人服用胴着—オランダの女性などのよく着ているボディスはひもでかなり調節がきく) を全員に着せようとしても無理、ということらしい。「グローバルなシスターフッド神話はあきらめ、女性たちの生活のもっと深い所での違いを認め合おう」というアメリカから参加の政治学者の言葉が紹介されている。つまり「妊娠中絶 (abortion rights)」のような個人的な問題よりも「健康 (health care) 教育 (education)」などの、社会的・経済的問題の方が大切との認識によるところらしい。

当面の関心事のズレも具体的に挙げる。中東は「子どもの養育権・離婚・相続法」、ラテンアメリカやアフリカは「貧困と人権侵害」、北米や西ヨーロッパは「保育施設とガラスの天井」という風に。そしてトルコのジャーナリストの “How can we be sisters when we don't understand one another?” 「我々はお互いに理解しあっていないままで、どうして姉妹になれるの？」というセリフで、しめくくっている。

要するに、女性問題にも万能薬はなく、それを再確認しなおす所からでないと、再出発は不可能ということだろうか。そう考えると “All for one” に添えられた? の意味も深まる。そしてその下につけられた、もう一つの説明文：

……, delegates are respecting cultural differences while seeking cooperative approaches to such universal problems as poverty, domestic violence and rape. 「文化の違いを尊重しつつ、貧困・家庭内暴力・レイプなどの普遍的な問題には協力的なアプローチを探していこう」の呼びかけも生きる。

前述のマニラ会議で私の目を奪ったもう一つは、“Women's rights are human rights.” (女性の人権こそ真の人権) だった。単数が複数かも記憶はアイマイだが、「そうだ! その通り!」と、心でカッサイを叫んだ気持ちは薄れない。

10年前のナイロビは、〈あごろ〉(斎藤さん) と出会った記念の場。集まった女たちの熱気に触れ、何かしなければとのおいしく言いがたい力が湧いてくる思いだった。〈あごろ〉も知らず、世界女性会議の情報も全く手に入らない大変さの中で、参加できたのが不思議なくらい、右も左もわからない子育ての日常のあけくれの最中だった。「女性の人権が認められてこそ、真の人権」は北京でも取りあげられたと聞く。北京には仕事の都合で参加できなかった分、どん欲に報告を待っている。

## エンパワーメント (Empowerment)

奥川 睦

Make decision (意志決定)、Making network (ネットワークづくり) と並んで、北京会議の三大キーワードの一つとして、この言葉は紹介されている。私には5年前、マニラでの国際女性会議の席上で、胸にズシーンときて以米の懐かしい言葉だ。英英辞典に empower は give power or authority (力や権威を与える) とある。—ment は名詞を造る語尾だから、「(女たちが) 力をつけること」「力を拡大し、真の実力を培うこと」を指す。enrich (富ませる) encourage (励ます) の en と基本は同じ。b, m, p, ph で始まる語につく時のみ em になる。

ワークショップ (分科会) を収録した分厚い冊子の扉に：

To bring together women and men to	男女が手をたずさえ、もたらそう。
challenge, create and transform	女が力をつけ、祝福されることを通じ
global structures and processes at all	て、地球規模の枠組みや、あらゆるレ
levels through the empowerment and	ベルでの取り組みを改革し、創生し、
celebration of women	挑戦することを。

と、empowerment が使われている。しかし雑誌「Time」の記事には、特にこの語を使っている形跡はない。日本政府代表団の野坂団長は「女性のエンパワメント」を使つたらしいが、もともとはNGOの用語。「政府も少しはNGOの影響を受けたのだろうか」と上野千鶴子・東大文学部教授は「北京女性会議リポート」(中日新聞)で述べておられる。Equality (平等)、Development (開発)、Peace (平和) は、ずっと掲げている三大目標で、それはそのまま踏襲されている。

9月11日号の「Time」は“All for one?”のタイトルで、カバー・ストーリーとして取り上げている。

Forget the myth of global sisterhood. At the Beijing summit, women seek strength diversity.

地球規模のシスターフッドの神話を忘れ、北京サミットで女性たちは、多様性を通じての力を探る。

サブ・タイトルつばいこの文に言う、myth (神話) が何を指すのかピンときにくい、本文をかいつまむと、各地の実情が違ふのだから、One-size-fits-all

## 「国民」には認められて

## 「個人」には認められない平和的生存権

飯岡祐保

「個人は国民ではないですって！」

先ごろ朝日新聞にこんな見出しが載ったのを覚えていらっしゃる方があろう。

「掃海艇派遣訴訟・憲法判断せず門前払い、大阪地裁・平和的生存権認めず」

十月二十五日の判決の翌日の記事だが、このほど、判決文を読む機会があった。以下に「争点に対する判断」という項目の中の文を引用する。

原告ら（大阪京都など二府四県の市民二百十二人）が被告ら（海部内閣や国）により侵害されたとして本件違憲無効確認の訴えによつて保護を求めている権利ないし利益が、原告ら固有の権利ないし利益ではなく、国民のすべてに等しく関わる利益にすぎないことは、その主張自体から明らかであるから——中略—— 国民としての地位に基づき行政庁の国政行為の違憲無効確認を求める訴訟を提起する途は現行法上認められていないから——中略——却下を免れない。

湾岸戦争に国民一人当たり一万円にあたる戦費を支出した上に、機雷除去作業に自衛隊（その名の如く、海外派遣隊ではなく、国内の自衛の為と称して作られた武装集団）を出したことが、「戦

争放棄をきめた憲法第九条等に違反」しないと、どうして言えるだろう。

東京の法廷では、大江志乃夫氏が原告証人として「機雷の除去は、上陸作戦にはつきものの戦闘行為にあたる」と証言している。

しかも除去地域は、国会で議論されたような、我国船舶の航路上、ではない。

淡路、阪神大震災で起こったような痛ましい被害をわざわざ人の手で起こすのが戦争というものだと、第二次世界大戦のとき東京で暮らした私は、昨日のことにように体験を思いだす。震災は、たつた一日だったけれど、戦争では、何回も何回も、いたる所で繰り返される。

だから、平和に生きる権利、「恐怖と欠乏をまぬがれる」生活がどんなに大切なものか、わかっている。

その権利を、この判決文では「国民のすべてに関わる利益にすぎない」（傍点は筆者）と、まるで破れた靴下を脱ぎ捨ててもするように書き、「原告ら固有の権利ないし利益ではなく」と、個人と国民とを、真つ二つにちよん切ってしまった。

この論法を裁判長個人、下村浩蔵氏にあてはめるとどうなるか。彼の平和的生存権は国民としては認めるが、個人としては「恐怖と欠乏からまぬがれる」ことは却下されることになる。そうすると、その考え方で行き着く先の日常生活の中で「恐怖と欠乏」が起こっても、専門職としての法律が支えとならない事態になるのではなからうか。戦時中に食糧の配給量だけでは生存が維持できなかった山口判事の例を思い出す。日常生活をないがしろにするのは男の発想というものだろう。

ことばというものの正確な表現を判決文はめざしていたであろうから、傍点の「関わる利益にすぎない」に注目しよう。このように、「黒でも白でもない、赤にすぎない」と表現した場合、重点

は黒か白であり、赤ではないという意味になる。あるいは、黒か白に注目していたのに、赤だけしかない、つまり、問題外だということになる。平和的生存権なる権利は、下村浩蔵裁判長の言うようにそれほど価値のないものなのだろうか。

日本国憲法の「文化的な最低限度の生活」の維持を保障する生存権をめぐることは、有名なアサヒ訴訟があった。最高裁まで行っているうちに結核患者の原告は亡くなったけれど、「生存権」定着に大きな意味を残した。

だいたい「生存権」が保障されるためには、平和がなくてはならない。その意味では「生存権」の基礎は「平和的生存権」である。「生存権」は個人のもの（生き死には個人以外の誰がかかわろう）だが、「平和的生存権」は個人のものではない。しかも「固有の権利ないし利益ではない」などという判断が、どこから出て来るのだろうか。

この論法では、国民というのは一人ひとりの個人の集合体だから、国民に認められる権利は個人にも及ぶのではないかと考えられるが、雲のようなところのない固まりの「国民」なるものの中に個人はどこをさがしても見当たらないようだ。

ファシズムというものは、第二次世界大戦中のドイツ・イタリア・日本にはびこっていた思想で、全体主義と呼ばれるそれは、日本国憲法の「主権者は国民の一人ひとりである」という条文によって乗り越えられているはずだ。その一人ひとりの主権者の意志に基づいて民主的社會が建設されるという設計図を、私たちは手にしていたのではなかっただろうか。三権分立はどこへ行つたのか。烏肌のたつような震えと混乱を感じているのは、私だけだろうか。

〈沖縄問題に怒りの声〉

## 私たちの「怒りのコブシ」

島袋 由記

去る十月二十一日、沖縄では八万五千人もの老若男女がはせ参じ「米兵の少女暴行事件糾弾県民集会」が開かれた。時を同じくして宮古でも三千人、八重山でも五千人の郡民による「抗議集会」がもたれた。それが地元沖縄にとつてどれほどの規模であつたのか、たとえば人口比に照らし、東京都下での八十五万人集会を想像してみれば容易に理解して頂けると思う。

今回の集会には二つの大きな特徴があげられる。一つは女性たちの参加が非常に多かったことであり、しかも組織動員型ではなく、一人ひとりの意志に根ざした個人参加者が際立っていた点である。それは、女たちが各々「言葉にならないほどの怒り、憤り」を持ち、「少女への卑劣で無残な暴力は、私たちすべての女たちへの暴力である」と心から受けとめ、「もう許してはならない」との強い意志の表出であつた。この女性たちのやむにやまれぬ思いは、へ強姦救援センター沖縄（REICO）発足へとつながり、精神科医、カウンセラーら専門スタッフの態勢も整い、十月二十五日にスタートした。

戦後五十年、沖縄の軍事基地の実態はほとんど変わらず、米軍による事件、事故、犯罪はひんぱんに発生し続けている。今度こそ、再びこのような事件をおこさないために、日米両政府の実効性のある解決策を望んでやまない。私たちの怒りのコブシは高々と上げたままであることを、忘れな

いでほしい。

（基地・軍隊を許さない・行動する女たちの会）

## 暴行の島・沖縄は、核施設が現存する島

木村 安彦

米兵による少女乱暴事件被害者小学生の悲哀な姿を想像するとき、結果的に基地との共存を強いられている大人社会の一員として、例えその子が近所の子であつたとしても、その子の目を見れるかどうか、その子を慰めてやれるかどうか、まったく自信がない。今できることは差別のシンボル・基地に対し、正面から「核兵器が貯蔵できない、持ち込めないはずの沖縄に、これほどの広大な軍事基地が一年以上も維持される理由がない」との確信を持ち続け、「沖縄から核施設を撤去させよう」との運動をさらに拡大するしかない（署名者数現在大人六〇三三人）。

少女よ見てておくれ。沖縄のすべての大人たちが君の事件を知り、まやかしの核抜き祖国復帰と真実の憲法に目を向け、「本土と沖縄の子どもの平等とは何か」を見つめ始めたよ……。

九月四日に起こった米兵三人による小学生少女乱暴事件に対する県内の抗議行動は、未来の子どもの環境を重視する立場から日米地位協定見直し論が中心になるなど、現実的対応を重点的に行なっているようだ。また、基地撤去や日米安保廃棄要求決議など、平和や人命の環境にまで踏み込んだ抗議もある。しかし、身柄引き渡し要求及び被害者に対する謝罪や完全補償を求める抗議はあるものの、重要な「二度と起こらない保証」と、「少女の心の癒し」に直結する「加害者と、その上司であるクリントン大統領の顔が見えてこないこと」に対する抗議がないことが残念に思える。



「アメリカの大統領までも」というのは、この問題の軸には、元在沖米軍核兵器整備兵・カーペンター氏の証言などで最近暴露された、非核三原則違反である沖縄の核貯蔵庫問題があるからだ。中国やフランスが「日本は米の核傘下」と指摘しているが、沖縄の米軍による核抑止力維持問題は、外務省も防衛庁も、もちろん熟知している。

また九月の北京・国連世界女性会議では「戦時下のレイプには厳しい処罰と補償」との国際的条項が「行動綱領」にも盛り込まれた。クリントン大統領にも厳しく抗議して国際問題にまで発展させなければ、沖縄は戦時下よりひどい状況に今後も捨てられ続けるということになる。

九月十四日、この問題に絡め、写真家の大石芳野さんが「沖縄問題が日本国民の問題としてとらえられていないのは、本土マスコミが小事として扱うからだ」との趣旨内容を、県の「平和シンポ」で東京の立場から怒りを込めて証言している。なぜ同じ国民でありながら、沖縄ではこういう信じられない事が起こっているのだろうか。こんな重大事件なのに今までの数々の事件のように、本土にも世界にも通じなくてよいのだろうか。このまま既成の諸団体に任せていると、今もつて本土には知られていない沖縄の核施設問題と同様に放置されるのではないかと、先々に強い不安がよぎる。

私たち一市民は、今度の事件の根底にある問題に対し、既成諸団体にも「米兵に対し「沖縄だけは広大な基地が今も存在し、非核三原則に反して核基地まで維持・使用されているが、沖縄は日本国内なんだ」と知らしめる努力を怠つてきた」ことを熟知させ、共に奮闘したい。この種の問題では市民に最も身近な団体である県P連さえ、「PTAは労働組合や政治団体とは違うのだから「基地撤去要求」はせず、「子どもの安全保障要求」しかできない」(九月十三日、県P連理事会)と既に結論を出している現実には寒けを覚える。

子どもたちの未来環境、平和や人命環境まで、今や純粹に訴えることができるのは一市民である。

今その少女が苦しんでいる、人間の尊厳といった基本的問題まで、世界に向かって代弁することも、私たち大人一人ひとりの責任ではないだろうか。県益優先という大義名分に押し流され、基地を容認させられているが、「非核三原則は国是、核貯蔵庫の容認されている沖縄など米兵は日本国内と認識できない」と訴えなければならぬだろう。

(沖縄から核施設を撤去させよう事務局)

## いまこの機を失えば沖縄の占領は百年続く

### 二十五人の沖縄女性が上京して陳情

山戸 伊奈

いよいよ迫ってきたクリントン来日。ここでいいかげんな決着をつけられては一大事と、沖縄の女性たちは、連日五百人が座り込みを続けていましたが、その中の二十五人が、〈基地・軍隊を許さない、行動する女たちの会〉東京要請行動団として、十一月十七日朝の一番機で上京しました。全国から寄せられた五万三千人分の署名を持つて、首相と外相に陳情しよう。

紅型(びんがた)の鉢巻をきりと締めた一行は、昼食もそこそこに、総理府から外務省に回りましたが、もちろん首相にも外相にも会えず「陳情担当」の官僚に思いのたけをぶちまけて、とにかく陳情書だけは手渡しました。

このウチナンチュと志を一つにしようと、ヤマトンチュも百人以上が集合。陳情の間、外務省の前でスピーク・アウト。協調する日蓮宗妙法寺の太鼓とともに道行く人の足を止めさせました。

この勢いをアメリカが察したのか(？)、クリントン氏は来日中止。しかし、今こそ正念場と、沖縄と本土の女性たちは夜は社会党系労組主体の「沖縄に連帯する11・17 全国集会(主催「同実行委員会」)に参加し、日比谷公園野外音楽堂のステージに二十五人が並んで、糸数慶子さん(沖縄県議)が熱烈アピール。その後五千人のデモ隊の先頭に立つて、衆議院、参議院でそれぞれ議員に請願書を手渡し、アメリカ大使館ではひときわ大声でアピールを。日本語を解さない大使館員に、高里鈴代さんがすかさず英語でスピーチ。この間、日本語の原文をさらに強烈な表現に変えたのはさすがでした。

翌十八日は、朝から全員でティーチ・イン。問題意識をいっそう深めて、午後は防衛庁裏の檜町公園で開かれた革新系市民団体主体の「村山首相は署名代行をするな! 基地撤去、安保条約解消をめざし、沖縄に連帯する大集会(主催「沖縄連帯大集会実行委員会」)に参加。米司令官発言への怒り渦巻く中、桑江テル子さんがアピールとシュプレヒコール。抜群の迫力でした。ここでは前夜と違って「安保廃棄」まで踏み込め、デモ行進の足取りにも力が入りました。

一同は買い物をするひまも、知人に会うゆとりもなく、そのまま空港へ。翌日からは二百五十人規模のハンストへと、胸が痛くなるような活躍です。飛行機代六万円は、ごく一部の人を除いてほとんど全員自己負担だった由。この捨て身の抗議が村山さんの目と耳にとまらなかったのは何とも残念。久米宏が筑紫哲世のニュース・ショウにでも出演してもらいたかったと、後からホゾを噛んだ次第です。

それにしても、野音からのデモで、先導車が「地位保全協定を見直そう!」と叫ぶと、「安保を廃棄する!」と声をからして切り返していた彼女たちの必死の思いが、主催者に届いた様子もなかったのが残念でした。

(東京・沖縄と連帯するヤマトの女たち)

— お産を考える

この夏、お産に関する本を何冊か読んでは健康でいられる力を持つていて、その著者の言うことに首を振ることもある。なにせ、この二年間、映画一本も見始まりは、命が産まれでる時にさかのほでも、この著者は好きだよ。分娩を「管ず、活字は新聞か「エッセ」（扶桑社の」ということを科学的に論ずることは、理「せず、「見守る」から。おまけに雑誌です」を読むぐらいの、いやはやな実はとても難しい。「人間の子には人間「産科学という学問の一番の特徴は、出んとも、という具合だったので、とてものおっぱいを」ということを情緒的でな産は管理可能だという妄想だ」なんて、満ち足りた。しかしながらウームウームく、免疫系の安定など詳細に理詰めで語はつきり言ってくれるものね。

きっかけは「ブライマル・ヘルス」そういう人こそ目からウロコがポロポロはとつきやすい。こちらを先に読んで（ミシエル・オダン著、大野明子訳、メ落ちるのではないだろうか。「ブライマル・ヘルス」に進むといいか

ディカ出版)。水中出産の創始者として 訳者は、地球科学の研究者から自分の もしれない。出産を迎える人にはハウツ  
知られるこの産科医は、その独特の分娩 出産体験を経て、産科医になつてゐる。―ものとして楽しく読めるかも。が、扱  
介助法を広めたから異色なのではなく、仰向けの姿勢で足首を固定され、ど太い つてゐるのは“出産”であつても、医師

## 北京世界女性会議行動綱領日本語訳

### 北京世界女性会議に提言する会仮訳

から産婦の目になって行動する彼女のあを残すために、多くの生身の女性の身体り方そのものは、自分の身体を医療機関と心を傷つける医療とは何か。代理母にゆだねなければならぬ現代人の誰にと なった当事者の「こんなはずではなかつても「見方を変える」ことの意味を知た」という声は「不妊女性への福音」のるエピソードとなるのではなからうか。

私は産んでしまった女だが、妊娠・出なつちやうんだらう。いやんなつちやう産の陽の部分より陰の部分へ思いが寄つよね。悔しい。そして悲しい。

てしまうのは「子どもを愛しく抱きしめ

る母」像と現実の自分との溝にため息つ

き続けた日々があるから。

\*

「母性は女の勲章ですか？」（産経新聞

社、絶版）で大日向雅美さんは、子を持

つ女と持たぬ女が分断させられる現実を

見据えている。操作される母性の奥深さ

かな、である。何気ない日常。何気なく

暮らす女。何気なく出会うことば。その

中に浮き沈みする残酷さを自分に問うて

みる。こういう本が絶版になる社会も、

その嘆きを軽くあしらうのでもなく、不

じつくりと問うてみる。

妊治療の名のもとにすすむ人間の選別へ

一つの間にやら、夏が終わっていた。の

流れを、怒りつつ、しかし冷静に解き

一冊の本、読むのに、何日かかってんだ

あかす。富める一組のカップルの遺伝子

ろうね、まったく。

（野寺夕子）

報が刊行された。

討議の結果修正された箇所を訂正して

組み込んだのではなく、修正箇所が手書

きで書き加えられているため、どの部分

がどのように変わったか、ひと目でわか

る。難解な原文もできるだけわかりやす

い日本語に訳されていて、読みやすい。

A4判153ページ八百円。英語の原文

は五百円。申し込みは〒150東京都渋谷

区桜丘14-10-31アジア女性資料センタ

へ。一気付へ北京女性会議に提言する会へ。

TEL 03-3780-5245

FAX 03-3463-9752

# 女ひとりドケチ旅 8

## イランへ(1)

辻 みゆき

ラーワルピンディーを出たのはどしやぶりの雨の日だった。

どうせ要らないだろうと思つて上海に傘を置いてきたのが悔やまれた。乾燥気候でもたまには雨が降るといふことをついつい忘れていた。丸さんも傘を持つてなかつたのでビニール袋をかぶつて駅まで走つていった。

その頃パキスタンでは列車中での犯罪が頻発していたそうで、プラットホーム、列車の乗降口、列車中での警戒が厳しかった。怪しい者が列車に乗つてこないか、銃を下げた警察が始終監視していた。

私たちはちよつと贅沢だとは思つたのだが、二人とも暑さに相当ばてていたのでエア・コンつき車室を予約していた。車室は鍵も締められて安全。涼しいし今夜はぐつすり眠れそう……。

イランとの国境に近い町、クエッタまでは一泊。砂漠を眺め、エア・コンのひんやりした風に吹かれながら私は気持ちよく眠りに就いた。

次の朝、目を覚ますと喉が痛かった。からからに乾燥して、声もしやがれ声しか出ない。どうやら冷房のせいらしい。そういえば私は生まれて初めて冷房がきいた所で寝たようだ。うちでエア・

コンを使い始めたのは私が下宿し始めてからだつたし、その前はもちろん扇風機だけだつた。下宿でも「ウインドウ・クーラー」と名がついていたが要するに窓にとりつける扇風機、というのを使っていたし、学校ではむろん扇風機さえも無し、結局バイト先や電車の中以外、クーラーのきいたところに長くいた経験はない。ましてやそういう所で一晚眠つた経験はなかったから、クーラーの害悪を正直言つて知らなかつた。旅中にあまり今までにしたことのないことをしてはいけない。おかげで私はその後ポーランドまで熱にうなされることになつてしまつたのだ。

## 女どし

クエッタに來た。ここへ來たからには明日はイランだ。白い石壁の宿で昼間は洗濯などをして過ごした後、夜はカレーを食べにいく。日本風の粘り気のある炊き方でない、「乾飯（かれいい）」の味も香ばしい。カレーはぴりつと辛くて香辛料がきいている。トルファンの野菜炒め、カシユガルのヨーグルト、フンザのミルクティーについて美味だつた。

翌朝早く街に出て丸さんと共に駅へ切符を買いに出かけた。

切符売り場には既に長い行列ができていた。丸さんたちと共に私も並ぼうとすると、人々の視線が一斉に私に向けられた。極東人女性つて見たことがないから珍しいんだな、と思つていると、丸さんが「普通、女性は列には並ばんみたいやで」と言つた。

見ると本当に列には男性しか並んでいない。女性はどこにいろのだろうと目で探すと、待合室のような部屋が目に入つた。開けつ放しになつた扉から何人かの女性の姿が見える。どうやら女性専

用待合室といった感じらしい。

切符買いは丸さんにまかせてその部屋に入っていた。

ベンチに五、六人ばかりの女性が座っている。私が入っていくとちよつと驚いた様子だったが、すぐににこりとしてくれた。彼女たちの向かいのベンチに腰を下ろすと、そのうちの一人が「こっちにいらつしやい」というように手で招いてくれた。

彼女の横に座ると、彼女が私に何か話しかけてきた。ウルドゥー語はてんでわからない。ここまですぐでなく英語で通じさせてしまつたので、ウルドゥー語は覚えなくて来てしまつたのだ。すると彼女は身振りで話すしかないと悟つたらしく、私の被つていたヨルダン製のベールを指し、お祈りをする身振りをした。もの問いたげな表情からして、どうやら私がイスラム教徒なのか尋ねているらしい。

首を横に振ると、「そうなの」というようににつこりとうなずいた。その後は言葉が通じないのでお互い何も話さず、にこにこは笑い合っているだけになつてしまつたが、私はふと彼女たちの写真を撮らせてもらおうと思つた。

一般にイスラム教国では女性の写真を撮つてはいけないと聞いていた。詳しくは知らないが、人前で顔を隠すようにするぐらいだから写真を撮られるのはまずいというのはいたいいかならずける話ではある。もつともイスラム教の国ではなくても本人の諒解なしに写真を撮るのは礼儀に反するが、イスラム教国では特にとんでもない非道と見なされるらしい。また撮られたのは女性でも、撮つた方に怒つて向かつてくるのは男性らしい。本当に女性自身が嫌がるものなのか、聞いたことがない。私は女性に写真を撮らせてもらいたいと思つていたのだが、なかなか街中では知り合いに



なる機会もなく、したがって写真を撮らせてもらう機会もなかった。それで男性諸君のいない今がチャンスと思つたのだ。

私がカメラを指して「撮つてもいいか」という身振りをすると、彼女たちの一人がさつと立ち上がつて待合室の扉を閉めにいった。「さあ、これで大丈夫」というふうに彼女たちの顔がほころんだ。ベンチに並んで腰かけると、ちよつとよそいきな顔になつてポーズをとつてくれた。シャッターを押すと喚声が起こる。

女性の写真を撮つてはいけないと言ひ出したのは誰だつたのだろう。まさかモハメッドがいた頃はカメラというものはこの世にまだ存在していなかつたから彼が言つたのではないはずだ。それに女が言ひ出した法ではないらしい。それにまた女がよかれと思つてゐる法でもないらしい。まったく男つてどこまでお節介なんだらう。

## 腕 輪

クエツタから国境タフマンまでは列車で一泊。私たちが列車に乗り込んだ時は既に席はなく、まゝ一日立つていなければならぬところだつたが、家族連れらしき人たちが私に「ここに座りなさい」というように彼らの間に一人分のスペースを空けてくれた。丸さんにはお呼びがこない。若いかわそな女性だときこういふとき得をする。

二十代の兄弟姉妹らしき彼らとはなんとか英語で話をすることができた。一番年上の兄は政治の話が好きだ。私はイラクの話をした。

一番下の妹が青や緑の腕輪をハンドバッグの中から取り出した。ごく細い、プラスチックでできた、こちらの女性がよく身につけている美しいアクセサリーだ。私の腕にはめてくれると言う。

みんなが見守る中、私の手が大きすぎると見えて何本もの腕輪が手首まで通らずに手のひらのところで止まったり、折れたりしてしまつた。

私の手は実際、特別に大きいのだ。日本人の女の子で私より大きな手をもつた人にまだ出会つたことがない。足も大きいし、頭も大きいから「末端巨大症」とでもいうのだろうか。幸いに一見してすぐ驚かれるというほどではないから日常生活には支障ないが、それでもたまに弊害がある。

初恋の君との最初で最後だつたデートの時、生まれて初めて（ただし幼稚園時代を除く）男の子と手をつないだ。二つ年上、十七の彼は私好みの繊細な容姿。全体に小ぶりにまともな感じがした。自分の手を覆うようにしっかりと握ってくれる彼の手の感触を期待していた私は、どきどきしながら握り返した彼の手がすつぽりと私の手のひらの中に収まつてしまつたことに大変ショックを受けた。自分の手が大きいとは思っていた。しかし特別に大きいとは思っていなかったし、ましてや男の人より大きいということがあり得ると思つてもみなかつたのだ。いくら彼が小柄でも、男の子だからというだけの理由で当然私より手が大きいものと思ひ込んでいたのだ。私は彼の分と自分自身の分、きまりが悪くなつてしまつた。彼も少なからず驚いたようで、思わず私の手をまじじと眺め、「辻さん、大きい手えしてるなあ」と一言。

そのときの私は緊張していたので笑いでごまかすことすらできずに、手ひとつのことで妙にしらけた雰囲気になつてしまつた。その事が原因でそれが最初で最後のデートとなつてしまつたとは言わないが、それもひとつの要因だつたような気がする。ロマンティックで恋に恋していた思春期の

少年少女にとつてはそんな些細なと思われることでも、自分たちの描いている恋人像とは違うという事で容易に幻滅してしまうのだ。

さて腕輪だが、いくら手のひらを丸めてみても骨組みが余程しつかりしていると見えて、腕輪のほうがボキボキ折れ続けた。私は申し訳なくて、もういいから、と言おうとしたのだが、彼女はあきらめない。バッグからハンドクリームを取りだして私の手に塗り、腕輪が手首に滑り込むようにしてくれた。さらに彼女が私の手を握り込んでくれたところでやつと腕輪は手首に収まつた。

その後ポーランドまでこの腕輪ははずさなかつた。お守りのような気がしたので。

一方その頃になると私の喉はかなり悪化し、ほとんど声が出なくなっていた。そういうときには無理をしてしゃべろうとしてはいけないのだが、旅路ではそうも言っていられない。

列車が十分ほど停車する度に列車から降りて行くと、なにしろ珍しいので人がわあつと寄つて来る。そして「どこから来た」から始まつてありとあらゆる質問をしてくる。今声が出ないからつて今度つていうわけにもいかない、一期一会なんだから。声にならないような声をふり絞つて答える。するとますます悪化する。

その夜は兄弟が床に布を敷いてつくつてくれた寝床で荷物を枕に眠つた。なぜか日本の夢を見てうなされてしまった。少し熱があつたようだ。

## 国境越え

翌日昼過ぎ国境タフマンに着く。

ここまで一緒だった兄弟姉妹とはここでお別れだ。

国境を前にずいぶん長く待たされたが、ようやくパキスタン側の出国審査が終わわり、いよいよイラン側へ。その前にパキスタンで買ってきたチャドルを着る。チャドルの上に背負うよりも風通しがいいので、ラクダみたいになって見た目にはちよつと異様だが、チャドルの下に一メートルのバックパックを担いだ。

まずパスポートを持って列に並ぶ。ここにくるとさすがにアメリカ人観光客の姿もなく、パキスタン人、イラン人のほかは丸さんともう一人の日本人男性と私ぐらいのものだ。本当に日本人だけはどこにでも、どのような辺境にでもいる。

パスポート審査のおっさんは仕事柄にもなく、英語が読めなかったと見えて「査証」のページではなく「追記」のところにスタンプを押してくれた。

ここまではなんともなかったがここからが勝負だろう、と鼻息が荒くなっていたのだが、後の残りの審査も何のことはなく終わってしまった。身体検査もなかった。それに何よりも、女性の審査官が何人かいた。例えば外貨の持ち込みチェックの責任者が女性で、ひとりで堂々と仕事をしている。国境の審査官に一人も女性がないという話は何だったのだろう。

国境から次の都市、ザヘダンまでバスが出ていたのでそれに乗る。この辺りでは女性はみなすつぽりと頭から黒っぽいチャドルを被っている。それでも真つ黒というのはほとんど無くて、大抵みな小さな花模様のはいった紺色やグレーのものを着ている。私などよほど熱心な信者に見られそう

だ。  
バスが走り出す時、窓の下で少年がアイス・キャンディーを売っているのに気づく。すかさず買

ったのはいうまでもない。熱っぽい喉にアイス・キャンデーは快かった。旅に出て初めてのアイ  
スだ。イランに来てよかったあ、と思わず幸せな気分になる。

### おばあさんの祈り

ザヘダンに着くとすぐイスファハン行きのバスが待っていた。なんだか先に進むことが快くなっ  
ていたのですぐそのバスに飛び乗った。ここからイスファハンまでは一泊二日の道程だ。

砂に反射した光までもが入ってくるのか、バスの窓にやけに光が差すような気がする。頭がどん  
どん熱くなってきた。シートの冷んやりしたところに額を押し当てる。

前の座席に座っていたおばあさんがそれに気づいて、額を押さえて何か私に言った。「熱がある  
のか」と問い掛けているようだ。「うん、うん」とうなずくと、荷物の中からざくろの実を取り出  
して、半分に割って私にくれた。そしてまた額を押さえて見せる。どうやらざくろの実は解熱作用  
があるということらしい。私が感激していると、おばあさんはさらにいくつかの錠剤をくれ、最後  
にアラアの神に祈ってくれた。栄養となる食べ物、薬をまずくれて、その上での神頼み、本当に有  
り難い。私の祖母もいつも私たち孫の事を仏さんに拜んでくれるが、イランのおばあちゃんも日本  
のおばあちゃんと同じようだ。

その夜私の熱はピークに差し掛かった。夕方頃にはもう座っていることができず、横にならなけ  
ればならなかった。チャドルが暑い。身体はぞくぞくするようだが頭が熱いので、「例外的緊急措  
置」ということにして頭のペールは外し、風通しを良くした。

何も喉を通らない。丸さんが休憩時にタオルを水で絞ってきてくれて額を冷やしてくれた。何時間うんうん唸っていただろう。真夜中を過ぎたぐらいにふと目が覚めると、ずっと楽になっていた。やっとアラアの神の思し召しが下されたのかも知れない。まだふらふらしていたが、休憩所でイラン名物の「なんとか・チェロ」という、ご飯の上に羊肉がのっているのも平らげることができるほどに回復していた。

## イスファハン

イスファハンには昼過ぎに着く。私の熱はまだ少しあるようだった。頭が重い。ともかく少し良いホテルに泊まって病気の方を治したい。

イスファハンの街は特にエキゾチックでもなく、ごく普通の近代都市という感じだ。ホテルの窓からは大きなサツカー場が見えた。夜間用のライトもある立派なやつだ。テレビで見るイランからの映像というと大部分はモスクの前で膝を突いて祈っている人たちの姿で、それ以外の映像はあまりにも少ない。サツカー選手の事など一度だつて紹介されたことがないだろう。

サツカー場からわずかに聞こえてくる声を聞きながら二日ぶりのベッドで寝る。

夕方日差しが和らいだ頃、街に散歩に出てみた。何を買うともなく店に入ったりしてみる。チャドルを着て歩くのは夕暮れ時が丁度いい。

(続く)

〈カンパのご報告、および御礼〉

七月四日、大阪ドーンセンターにおいて開催された「北京会議フォーラム」

に講師として斎藤千代さんが来阪されました。(へあこら大坂)は、講演会場で「アンデスの女たち」の宣伝を兼ねてアンデスの写真展示をしたり、(へあこら)の出版物を販売させていただきました。講演会のあと斎藤さんを囲んで交流会をもち、大震災のカンパとして(へあこら本部)に届けられた基金と205号の売上を加算した二四万六七六二円から一〇万円を、西宮で救援活動に取り組んでいる石井布紀子さんに贈呈いたしました。また、残金で、当日の販売用を送られた本をすべて引き取り、阪神間で被災された会員の方々

にお見舞いとしてお送りしました。カンパをいただいたり205号をお買い上げいただいた方々に感謝をこめてご報告するとともに、寄せられたお便りのいくつかをご紹介します。

(澤田・山際)

\*

◆このたびは、書籍をご送付いただき、誠にありがとうございます。「あららしいお心配りうれしかったです。それから」にしても被災された方々にとつてゆつくり心落ちつけて読書すること

はたやすいことではないかもしれない。ただこんなときに読んだ本や語らった話の内容は心にしみていつまでも残りますね。（三田市・西田冬至子）

\*

ご報告が遅れましたが、カンパを下  
さったのは次の方々です。(敬称略)

青森県 葛西 京子

岩手県 菅原 春一／中村 トキ／

西村 幸雄

福島県 山田 美恵子

茨城県  
沼尻  
清子

群馬県 西山美津代

埼玉県 足立 邦彦／柏木 可保／

栗田美智子／桜井 春子／

柳原 洋二／吉川 静江

北沢 健／高橋 妙子／

田畑みどり／広幡 和子／

藤崎 恭子

伊藤 裕子／岩間 伸之／

浦野 いく／遠藤 和子／

北村三和子／斎藤 千代／

佐久間百合子／貞閑 晴／

しまようこ／下光 軍二／

末永 一／竹居 昌子／

田中 秀子／田辺 光野／

坪沼 京子／榎本 芳恵／

丸山 英子／三尾 英子／

八木 江里／山崎 美代

井上 輝子／大塚 澄子／

木村 茂子／藤原 和美／

松本 秀子／山口美代子

田中 はるみ

平林よし子／百瀬 仁美／

竹内 和恵

福井県

静岡県

平林 京子

石上なおみ／市川 泰子／

稲川 豊子／入江 幸江／

勝又 敏子／鈴木 光代／

武田 宏／寺本 良弘／

松永たか子／毛利 嘉子／

山梨智恵子／鷲尾 本子／

猪飼 暢美／沖 章枝／

柿本 静香／国松よう子／

鈴木 益美／田口由美子／

竹内 美恵／朴 明子／

深谷 桂子／山崎 雅子／

渡辺 雅江

市橋三千子／加納 啓文／

岩間 伸之／粟津 主税／

寿岳 章子／田中はるみ／

山本 智子

澤田 和子／氷室美耶子／

森屋 裕子／横山 康子

梶本 正子／亀田 寿代／

瀬戸 弘大／戸田喜久雄／

濱名 育代

和歌山県 浜本 和美

岡山県 市場 恵子／川端 憲子／

名越 軍治

広島県 蔵本 賀代／堤 良子／

村上美代子／森下 明子／

愛媛県 武智 治子／益田真由美／

鳥取県 山根マツ子／山本 竜蔵／

山口県 藤本 道代

福岡県 甲木 京子／辻 和子／

吉田 千種

(万一記載漏れがありましたら、ご連絡下さい)

### 〔沖縄号を読んで〕

◆沖縄特集、泣きました。私たちが生きていくこと、何もせずに生きてきたこと、本当にどうすれば許してもらえるのだろうか……。今の時代に責任がある。今、私たちは、この時代と歴史をつくっている一人なんだと痛感しました。ありがとう！ 本当にありがとう



う！ (鳥取 芦谷 美鈴)

\*

◆沖繩の少女強姦事件をラジオで聞いた朝、私は「やつと沖繩の人たちは声をあげることができたんだ」と、誰に向かうでもなく言っていました。いいえ、目の前にいた小6の娘(被害者の少女と同年齢だと知らなかったのです)に語っていたのだと思います。そして、十一月十八日「あごろ」を受け取ったのです。開くと同時に、一枚の紙片が落ちてきました。それは、斎藤千代さんの「米兵暴行事件の初公判に触れて」と題したものでした。「斎藤さんが命を削って書いたのだ。命はこうして削るのですね」と思った瞬間、私は娘にこの紙片と、高校生の掲載文を読んでいた。

読み終えた私は、〈あごろ鳥取〉で百部は売りたいと思いました。この号だけは、「貸すのではなく売りたい」

と思ったのです。斎藤さんの沖繩タイムスへの掲載文で、強調してあった女と政党の部分省略し(より多くの人に買ってもらいたいから)、私はワープロを打ちました。購入窓口に私の名前を書き「一部一、二五〇円、但し五部以上は一部一、〇〇〇円」とし、カnpaにしようと考えたのです。既に紹介文を手渡した人もあるのですが、早朝目覚めた私は、「五〇〇円の方が売れる」と、一部五〇〇円に打ち直していました。そうだ、斎藤さんの掲載文とお知らせを地元紙「日本海新聞」に載せてもらうことを、今書きながら思っています。

一人でも多くの人に情報を伝えるには五〇〇円? 支援費を重視すると一、二五〇円? と、思案するのではなく、私が購入できる五〇〇円の意味を伝えることに決めました。

(鳥取 前田 享子)

### 〈編集後記〉

◆北京女性会議に参加するために準備に忙しい斎藤さんから、「名編集者の山際さんも職場を退かれて自由の身になられたことだし、大阪でも「あごろ」を編集して頂けませんか」との申し出がありました。山際さんと相談をして、大阪からは誰も北京に行かないことだし、「協力をしましょうよ。前の〈阪神大震災〉特集号で取り組んだ売り上げのカnpaなどの報告もしなければならぬし」と安請け合いをしてしまいました。

西宮でポランティアの拠点をされている石井さんにたまたまお会いして意気投合、「その後の阪神」を伝えようと、九月に座談会を開くことからスタートしました。その座談会の四時間に及ぶテープを起こすことを受け持った私は、イヤホーンを耳にワープロキーを打ちながら、テープを何回も聞き、

テープ起こしをしたのです。仕事の合間にする慣れない作業で、肩が凝るやら目がチカチカするやら。「えらいこと引き受けてしもたなあ」と後悔しながら、打てたものを、山際さんのもとへファックス送信をして、訂正してもらったのをまた打ち直すという作業をくり返しました。長年編集者として仕事をしてこられ、やつと定年を迎えてゆつくりしようと考えておられたのに、山際さんにもご迷惑をかけました。またボランティア活動に多忙な石井さんにも加筆、補筆をお願いし、東京の編集部も含めてこれらすべてファックス通信と速達とのやりとりでやつとまとめることができました。充分な編集とはいえないと思いますが、後二か月で一年を迎える現地のようですが、少しでも伝わればと思います。

阪神大震災には多くの方がボランティアをされましたが、私は今回は仕事

を最優先とし、自らの身体を使うことができませんでした。せめてへあごろに協力をして、マスコミの取り上げなかった女性のこまやかな活躍を、会員のみなさまに知っていただけたらと、この号の編集に協力いたしました。沖組号とともに、たくさん購入をして少しでも多くの方に広めることで私のボランティアとしたいとおもいます。

(大阪 澤田 和子)

◆次から次へと「事件」が起こつて、「阪神」がだんだん遠くなつていた時、編集の末端にかかわつて、また阪神が近くなりました。女の視点かららしい情報に心を打たれています。それにしても「やりきれなくなるとレイプする」とは！ 沖組の問題と重なつて、なんとも切ないですね。 (東京 千)

◆「一時はあんなにたくさんいたボランティアがすっかり少なくなつて……」という神戸からの言葉に身もすくむ思

いです。沖組号そして阪神号、「いいことをしている」という一時的な満足感で編集にたずさわつてはいないか、自分自身を厳しくチェックしなければならぬと感じました。神戸のみなさん、微力ながら、この号がお役に立てれば幸いと思います。 (千葉・礼)

◆編集後記を予定していた石井布紀子さんが、ペンをとる間もなくヴェトナムへ。最後に問い合わせが必要などころも出ましたが、仕方なく見切り発車します。

でも、遠い阪神がとても身近になりました。ボランティアも、これからこそ必要なのですね。冬休みに、息子を……と考えています。 (東京 村)

◆沖組号、アツというまに在庫ゼロに緊急増刷します。一部でも二部でも広めてください。この阪神号も売れて、また「第二次カンパ」ができると思いますね。 (千葉・浦)

アンデスの女たち ―フェミニズムに燃える

Cアンドレアス著  
サンディ・サカモト訳 ￥1339

本ものの地方分権・地方自治

浪江 虔著 ￥800

ワグナーと人種差別問題

ゴットフリート・ワグナー著  
岩淵達治訳 ￥700

消費税は廃止できる

北野弘久 ￥700

貧しい「経済大国」を撃つ

降旗節雄 ￥700

学歴社会をぶつつぶせ!

尾形 憲 ￥800

非核法・非核条約

新護憲の三千語運動 ￥520

サイレント マイノリティの BOC出版部

あごら 213号 ●発行 1995年12月10日

●編集 あごら大阪・阪神

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替00100-0-5264

●発行人 あごら企画会議 定価883円(857円+税26円)

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球

その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた

かけがえのない地球  
かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから  
たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だけれども だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあこら

人と人の出会うひろば

へあこら

人と人の共に生きるひろば

女による女の BOC 出版部

〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303(中公ビル)

ISBN4-89306-049-X C0036 P883E

定価 883円(857円+税26円)